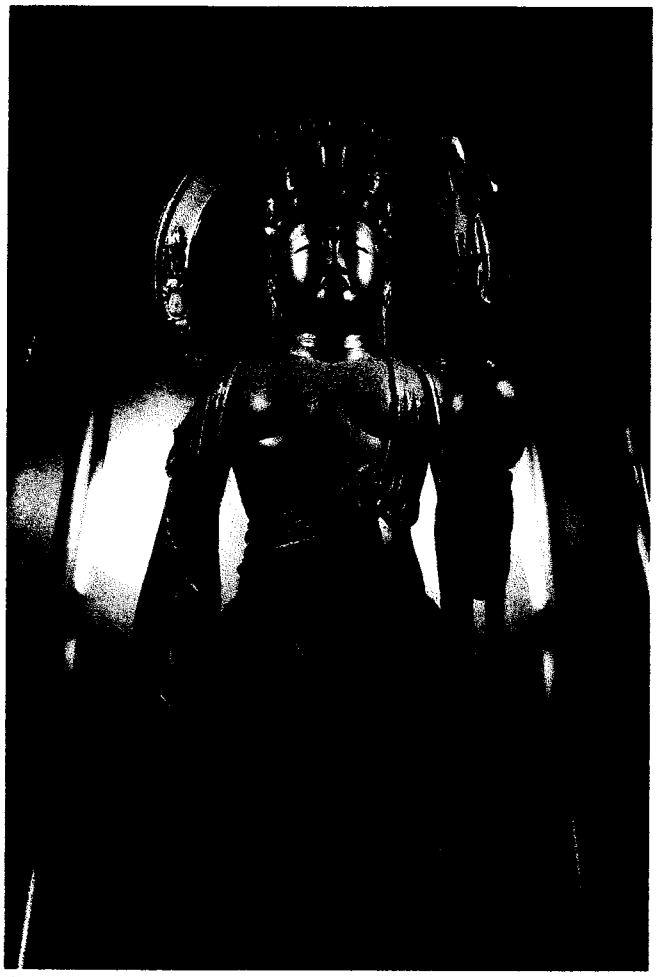
南山城、その輝ける歴史の道をゆく

―泉川の滔々とした流れに沿って―



主催　備陽史探訪の会　　旅行委員　篠原芳秀・平田恵彦

平成２１年(2009) 6月6日・7日(土・日)

「南山城、その輝ける歴史の道をゆく」行程表
ー泉川の滔々とした流れに沿ってー

《初日（6月6日［土］）》

＊福山駅北口集合	６：１０	
福山駅北口発	６：１５	
＊福山東ＩＣ着発	６：３０	（山陽自動車道へ）
＊龍野西ＳＡ着	７：５０	（休憩は場合によっては三木ＳＡ１回に）
龍野西ＳＡ発	８：０５	
＊西宮名塩ＳＡ着	９：００	
西宮名塩ＳＡ発	９：１５	
＊大山崎ＩＣ着	９：５０	
＊松花堂庭園着	１０：１５	（八幡市八幡女郎花４３）
松花堂庭園発	１０：５５	
＊男山ケーブル着	１１：１０	（３分程度で着きます）
男山ケーブル下発	１１：１５	
男山ケーブル上着	１１：２０	
＊石清水八幡宮本殿着	１１：２５	（八幡市八幡高坊３０）
石清水八幡宮本殿発	１１：５５	
＊青少年研修センター着（昼食）	１２：００～１２：４５	
青少年研修センター発	１２：５０	（帰りは歩いて山下へ）
＊高良神社・頓宮着	１３：１０	
高良神社・頓宮発	１３：２５	
＊航海記念塔着	１３：３０	
航海記念塔発	１３：３５	
＊石清水八幡宮発	１３：４５	
＊大住車塚古墳着	１４：０５	（京田辺市大住字八王子）
大住車塚古墳発	１４：２０	
＊月読神社着	１４：３０	（京田辺市大住池平３１）
月読神社発	１４：４０	
＊酬恩庵（一休寺）着	１４：５５	（京田辺市薪里ノ内１０２）
酬恩庵（一休寺）発	１５：４０	
＊大御堂観音寺着	１５：５５	（京田辺市普賢寺下大門１３）
大御堂観音寺発	１６：２０	
＊下司古墳群着	１６：３５	（同志社大学構内にある
下司古墳群発	１６：５０	京田辺市多田羅都谷１－３）
＊同志社大学歴史資料館着	１７：００	（同志社大学構内にある）
同志社大学歴史資料館発	１７：２０	
＊筒城宮址碑着	１７：２５	（同志社大学構内にある）
筒城宮址碑発	１７：４０	
＊ウェルサンピア京都着	１７：５０	（京田辺市多々羅西平川原39－16）
＊夕食・宴会	１９：００～２１：００	
＊就寝	２２：００	

《２日目（6月7日［日］）》

＊起床	６：３０	
＊朝食	７：００	
＊出発	８：００	
＊飯岡古墳群（穴山梅雪墓）着	８：１５	（京田辺市飯岡）
飯岡古墳群（穴山梅雪墓）発	９：００	
＊椿井大塚山古墳着	９：２５	（木津川市山城町椿井）
椿井大塚山古墳発	９：５５	
＊泉橋寺着	１０：１０	（木津川市山城町上狛西下５５）
泉橋寺発	１０：３０	
＊山城郷土資料館着	１０：５０	（木津川市山城町上狛千両岩）
山城郷土資料館発	１１：２５	
＊わかさぎ温泉笠置館着	１１：５０	（相楽郡笠置町笠置隅田２４）
昼食	１１：５５～１２：３５	
＊わかさぎ温泉笠置いこいの館発	１２：４０	（2回に分けてマイクロバスで山上へ）
笠置山山上駐車場合流	１３：１５	
＊笠置寺山門着	１３：２０	（笠置町笠置笠置山２９）
笠置寺山上発	１４：２５	
わかさぎ温泉笠置いこいの館合流	１４：５５	
わかさぎ温泉笠置いこいの館発	１５：００	
＊恭仁京跡（山城国分寺跡）着	１５：２０	（木津川市加茂町例幣）
恭仁京跡（山城国分寺跡）発	１５：５０	
＊石のカラト古墳着	１６：２０	（木津川市兜台2丁目・奈良市神功１丁目）
石のカラト古墳発	１６：４０	
＊宝来ＩＣ着	１７：１０	
＊名塩ＳＡ着	１７：５０	
名塩ＳＡ発	１８：０５	
＊岡山ＳＡ着	１９：４０	
岡山ＳＡ発	１９：５５	
＊福山東ＩＣ着	２０：３０	
＊福山駅北口着	２０：４５	（(^-^)お疲れ様でしたぁ～♪）

（註）あくまでも目安です。当日の都合により変更する場合があります。

南山城、その輝ける歴史の道をゆく
ー泉川の滔々とした流れに沿ってー

【参加者名簿】

《旅行委員》

ck No.	氏　名	郵便番号	住　　所	電話番号
CONFIDENTIAL 備陽史探訪の会 個人情報が含まれるため掲載できません。				

《参加者》

ck No.	氏　名	郵便番号	住　　所	電話番号
CONFIDENTIAL 備陽史探訪の会 個人情報が含まれるため掲載できません。				

CONFIDENTIAL
備陽史探訪の会
個人情報が含まれるため掲載できません。

※市外局番のない電話番号はすべて（０８４）が省略してあります。
※この名簿は参加者の友好をはかるためのものです。個人情報保護のため、決して他の目的には使用しないでください。

【ウェルサンピア京都　部屋割】

３１１
３１２
３１３
３１４

３１５
３１６
３１７
３１８
３１９

３０５

CONFIDENTIAL
備陽史探訪の会
個人情報が含まれるため掲載できません。

６月一泊旅行資料
南山城、その輝ける歴史の道をゆく
―泉川の滔々とした流れに沿って―

★松花堂庭園

《松花堂外園》

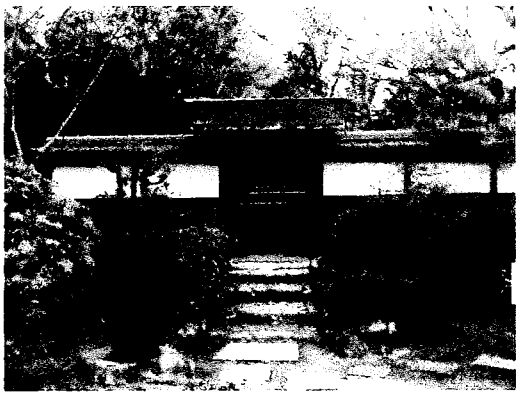
松花堂（しょうかどう）は、京都府八幡市八幡女郎花４３番地にある日本庭園と美術館がある。国指定史跡。

松花堂昭乗（しょうじょう）が江戸時代初期（寛永１４年[1637]）にかまえた方丈と庭園で、現在八幡市立松花堂庭園・松花堂美術館として整備されている。今回は時間の関係で庭園のみ探訪する。

松花堂庭園は外園と内園に分かれる。外園は約４００種類の竹がある池泉回遊式日本庭園である。中でも金明孟宗竹は宮崎県東臼杵郡と福岡県久留米市で発見されたもので、孟宗竹が突然変異して生まれた竹である。福岡県では、国の天然記念物に指定されている。金色の地肌に一節飛びに表と裏に緑の縞が入っており、全体として金色と緑の市松模様になっている非常に珍しい竹である。

外園の一郭に吉井勇の歌碑がある。歌人の吉井勇は、戦後まもなくの昭和２０年(1945)１０月から昭和２３年(1948)８月までの間、松花堂庭園の近くの宝青庵で暮らしていた。当時、谷崎潤一郎や志賀直哉などの文人・文化人が八幡に訪れていた。吉井勇が昭乗を偲んで詠んだ歌が刻まれている。

他に、茶室の松隠、梅隠、竹隠や砧の手水鉢がある。また、松花堂美術館別館のギャラリー２室がある。


《松花堂内園入口》

内園は京都府指定文化財の松花堂、草庵茶室兼持仏堂がある。また、松花堂書院は石清水八幡から移築された京都府登録文化財で、小早川秀秋の寄進である。書院前庭には、カエデやイチョウがあり、秋の紅葉は見事である。紅色や黄色のコントラストが秋の風情を盛り上げる。縁側から眺める庭から松花堂の秋を満喫できる。

なお、築山は「東車塚古墳」という前方後円墳で、木津川流域の王墓の一つである。

★東車塚古墳

松花堂庭園内にある前方後円墳。東高野街道を挟んで２基（もう１基は西車塚古墳）の前方後円墳が並んでいる。築造年代は５世紀後半と推定されている。

東車塚古墳は前方部が削平され、松花堂庭園の築山になっており、古墳の風情はほとんど残っていない。全長は９４ｍ、後円部径５３ｍ、前方部幅３０ｍである。後円部、前方部にそれぞれ埋葬施設があった。後円部は粘土槨で、銅鏡、勾玉、素環頭大刀、鉄剣、鉄鏃、甲冑、鉄斧などが出土した。前方部は木棺直葬と推定され、新山古墳（奈良県広陵町）と同笵の三角縁神獣鏡、内行花文鏡、龍鏡等が出土している。

《東車塚古墳》

『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告　第十三冊』（昭和七年[1932]、京都府）には、「最初明治三十年、前方部地均しの際、地表下約二尺にして土砂に混じ偶然古鏡一面と剣身一口とを發見し、此部分に於ては何等特殊の構造を認めざりしと云ふ」とある。

☆松花堂昭乗

天正１０年(1582)～寛永１６年(1639)９月１８日

江戸時代初期の真言宗の僧侶、文化人。俗名は中沼式部。堺の出身。豊臣秀次の子息との俗説もある。書道、絵画、茶道に堪能で、とくに能書家として高名であり、書を近衛前久に学んだ。また、大師流や定家流も学び，独自の松花堂流（滝本流ともいう）という書風を編み出し、近衛信尹、本阿弥光悦とともに「寛永の三筆」と称せられた。

天正１０年(1582)、摂津国堺に生まれた（『中沼家譜』）。天正１２年(1584)説もあるが、これは『松花堂行状記』による。文禄２年(1593)ごろ近衛信尹に仕える。これは、昭乗の兄（中沼左京）が一乗院門跡尊勢（近衛信尹の次弟）に仕えていたことによる。

慶長３年(1598)、石清水八幡宮に入り出家、瀧本坊実乗に師事して密教を学んだ。その後、権僧都宝弁について両部灌頂をうけ阿闍梨位に上がった。慶長２０年(1615)５月、大坂落城後、狩野山楽を匿っていたことで徳川方の厳しい詮索を受けたが、昭乗は「山楽は絵師であって武士にあらず」と言い張り、事なきを得た。

元和５年(1619)５月～６月、徳川義直と近衛信尋を対面させるため奔走。元和９年(1623)６月には、将軍秀忠・家光の上洛に際しての準備に奔走。寛永元年(1624)、近衛信尋

の推挙で将軍家書道師範として江戸に下向した。寛永３年(1626)６月１１日、徳川義直を席主とした茶会（昭乗は小堀遠州とともに近衛信尋、一条昭良、一乗院尊覚法親王、八条宮智仁親王等を招待）を催し、公武間の斡旋に尽力した。

寛永４年(1627)、実乗の死後（３月２３日没)、瀧本坊住職となる。寛永５年(1628)７月、大徳寺龍光院蜜庵で、江月宗玩のために小堀遠州、狩野探幽とともに絵筆をふるった（床脇小襖絵)。小堀遠州は昭乗のために瀧本坊に茶室「閑雲軒」をつくった。寛永６年(1629)、沢庵宗彭の紫衣事件による配流を嘆き和歌を贈る。寛永８年～寛永１０年（１６３１～１６３３）の間の茶会については『松花堂茶会記』に詳しい。寛永１１年(1635)６月、徳川義直と面会。寛永１４年(1637)１１月、瀧本坊の焼失を期に瀧本坊を弟子の乗淳（昭乗の兄中沼左京の子）に譲り、自らは猩々と号して風雅の生活を送る。同年１２月、住坊泉坊の一隅に方丈を建てて松花堂と称した（「１２月１６日付『昭乗宛遠州書状』および１２月２３日付『永井直清宛昭乗書状』」)。寛永１５年(1638)３月、江月宗玩とともに吉野の桜を見に奈良を旅する（『松花堂芳野道之記』)。帰路、奈良野田の長闇堂に久保利世を訪ねる。

《松花堂昭乗》

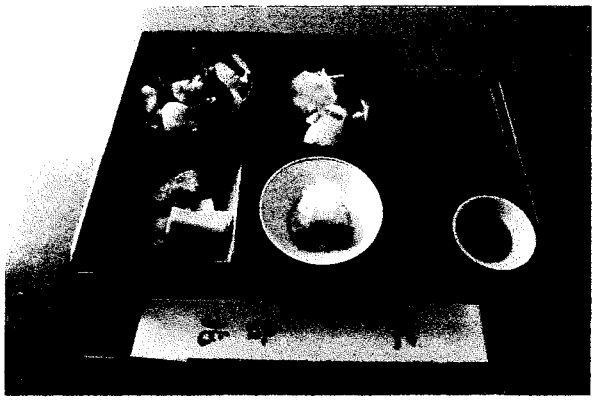
寛永１６年(1639)、このころから昭乗の背中に腫れ物ができ、昭乗は痛みをこらえる日々が続いた。昭乗の師であった実乗、また実乗の師の乗裕も背中にはれものができ、それが原因で亡くなっている。昭乗はこれにより自分の死期を悟ったという。伏見奉行だった小堀遠州は、昭乗を伏見に呼び、名医による治療を受けさせたが、効果はなかった。近衛信尋も病気見舞いに訪れるなど、多くの人たちに愛されながら同年９月１８日、５５歳の生涯を閉じた。本阿弥光悦の８０歳などと比べると「寛永の三筆」の中では短命であった。昭乗の墓は、八幡市八幡平谷にある泰勝寺にある。

☆松花堂昭乗と松花堂弁当

松花堂弁当は、中に十字形の仕切りがあり、縁の高いかぶせ蓋のある弁当箱を用いた弁当のこと。仕切りのそれぞれに刺身、焼き物、煮物、飯などを見栄え良く配置する。盛り分様式としては、ごはんと数種類のおかずを組み合わせたものであり、幕の内弁当に似ているともいえ、しばしば混同もみられる。しかし源流は、幕の内弁当が本膳料理

の流れを汲む江戸時代に遡るものであるのに対し、松花堂弁当は懐石料理（茶料理）の流れを汲み昭和になってから誕生した様式であり、歴史は大きく異なる。

「松花堂」の名は、江戸時代初期の石清水八幡宮（京都府八幡市）の社僧であった松花堂昭乗に因むものである。昭乗は、農家が種入れとして使っていた器をヒントにこの形の器を作り、絵具箱や煙草盆として使用していた。



《吉兆の松花堂弁当》

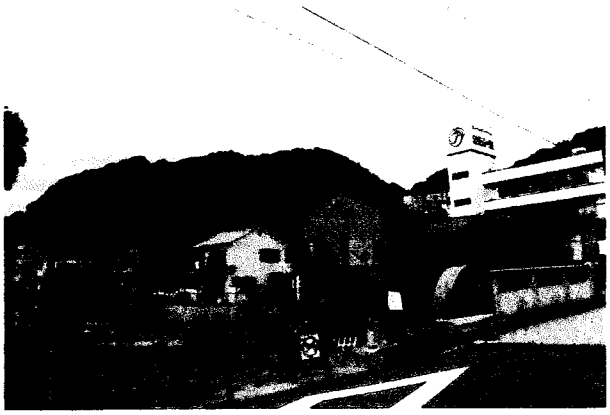
しかし、その入れ物が松花堂弁当に発展したのは、それから数百年たってからである。昭和の始め（昭和８年[1933]ころとされている)、代々式部卿を務めた貴志宮家の大阪（桜宮）邸内の茶室「松花堂」で茶事が催されたさい、日本屈指の名料亭である大阪の「吉兆」の創始者である湯木貞一が、貴志家の当主、貴志奈良二郎（２代貴志泉松庵）からこの器で茶懐石の弁当をつくるようにと命じられ、後にその事が話題となり、松花堂弁当の名が広まった。十字形の仕切りがあることで、見た目が美しいだけでなく、互いに味や匂いが移らないと考えたためである。湯木は、当時他家から松花堂弁当の依頼を受けると、その都度貴志家への挨拶を怠らなかったという。

異説として「松花堂昭乗が、上記の十字の仕切りがはいった箱に料理を盛って、来客をもてなした」とするものもあるが、おそらくこれは後世の創作あるいは誤解に基づくものであると考えられている

なお、国史跡松花堂庭園敷地内には「吉兆　松花堂店」があり、松花堂弁当（税込３８５９円）が食べられるようになっている。

★石清水八幡宮

石清水八幡宮は京都府八幡市八高坊３０番地に鎮座する。男山（おとこやま）山上にあるので「男山八幡宮」ともいう。宇佐神宮などとともに日本三大八幡宮のひとつに数えられる。二十二社の上七社（かみのななしゃ）の一つであり、旧社格は官幣大社。本殿など建造物９棟が国の重要文化財に指定されている。また、本社は伊勢神宮に次ぐ日本第二の宗廟といわれた。



《男山遠景》

祭神として以下の三神、すなわち①中御前一誉田別命（応神天皇）、②西御前一比咩大神（宗像三女神）、③東御前一息長帯姫命（神功皇后）を祀り、「八幡大神（はちまんのおおかみ）」と総称する。

清和天皇が即位した翌年の貞観元年(859)の夏、弘法大師空海の弟子であった南都大安寺の僧行教が宇佐神宮に参詣したさいに「われ都近く男山の峰に移座し国家を鎮護せん」との神託を受けた。これを受けて、その翌年の貞観２年(860)、清和天皇の命により社殿を建立したのを創祀とする。「石清水」の社名は、もともと男山に鎮座していた石清水山寺（現在は石清水八幡宮の摂社）に由来する。

以来、京都の北東にある比叡山延暦寺と対峙して京都の南西の裏鬼門を守護する王城守護の神、王権・水運の神として皇室・朝廷より篤い信仰を受け、天皇・上皇・法皇などの行幸啓は２５０回余を数える。

《石清水八幡宮拝殿》

また、源氏をはじめ、足利氏・徳川氏・今川氏・武田氏など、多くの清和源氏が氏神として信仰したことから武神、弓矢の神、必勝の神として崇敬された。

当社の御神前で７歳の春に元服して「八幡太郎」と称した源義家の父の源頼義が、河内源氏の氏神とした壺井八幡宮は、石清水八幡宮を源氏の本拠地の河内国石川郡壺井（大阪府羽曳野市壺井）に勧請したもの。また、鎌倉の鶴岡八幡宮は、源頼義が石清水八幡宮を勧請した鶴岡若宮にあり、源頼朝が幕府を開くさい、鶴岡若宮を現在地に移し、改めて石清水八幡宮を勧請したことを創祀とする。

創建以来、幕末までは神仏習合の宮寺で石清水八幡宮護国寺と称し、東寺（教王護国寺）や清水寺、比叡山延暦寺、仁和寺、鹿苑寺（相国寺・金閣寺・銀閣寺）、大安寺など、多くの寺院との歴史的関連が深い。また、河内源氏と競合相手と考えられている伊勢平氏もこの社を重んじており、平正盛が造営の功を上げたことや平清盛ら伊勢平氏の主だった人々が八幡宮の臨時際で舞人を演じたとする記録が残されている。

明治時代の神仏分離までは護国寺や極楽寺、弁天堂を始め「男山四十八坊」と呼ばれる数多くの宿坊が参道に軒を連ね、「寛永の三筆」として知られる松花堂昭乗も八幡大菩薩に仕える社僧の一人であった。

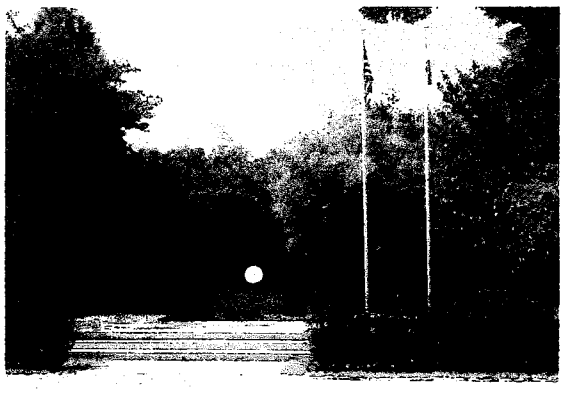
明治元年(1868)、仏教的神号の「八幡大菩薩」は明治政府によって禁止された。石清水八幡宮や鶴岡八幡宮の放生会は仲秋祭に改めさせられた。

明治４年(1871)、官幣大社に列するとともに、社号を「男山八幡宮」と改称されるが、大正七年(1918)には、石清水八幡宮に復した。

また現代では、松下電器産業の創業者でもあり「経営の神様」とも称された松下幸之助が深く信仰したほか、厄除開運、必勝、商売繁盛、家内安全などの御利益を願って全国から参拝者が足を運ぶ。

境内には、国の重要文化財に指定されている社殿をはじめ、楠木正成手植えの大楠（京都府指定天然記念物）や、織田信長奉納の「黄金の樋」「信長塀」などがある。高良神社近くには、高さ約６ｍという全国最大規模の五輪塔である航海記念塔が、書院庭には永仁３年(1295)銘の灯籠があり、いずれも重要文化財である。毎年９月１５日の石清水祭は、鳳輦渡御（ほうれんとぎょ）・勅使参向・放生会・胡蝶（こちょう）の舞などが行われている。

★エジソン記念碑

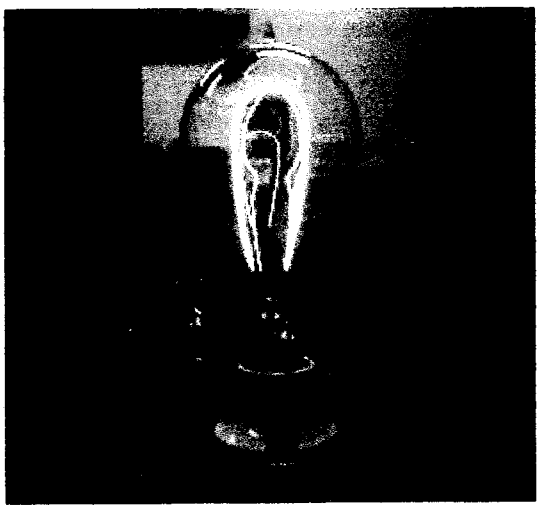


《エジソン祈念碑》

男山山上の石清水八幡宮神苑内にエジソン記念碑が建っている。これは、発明王トーマス・アルバ・エジソンが八幡の竹を使って白熱電球の実用化に成功したことを記念し、昭和９年(1934)に建立されたものだ。

エジソンは白熱電球の点灯時間を飛躍的に延ばすため、動物の爪や植物の繊維など、ありとあらゆる材料を使って実験を繰り返していた。その材料は６０００種を数えたという。そんな時、研究室にあった扇に使われていた竹を使って実験すると、思いのほか、良い結果が得られた。それで世界各国から最良の竹を求めることになった。

明治１３年(1880)夏、エジソンの特命を受け、日本にやって来た助手のウイリアム・Ｈ・ムーアは、初代京都府知事の槙村正直から「竹なら八幡か嵯峨野がいい」と紹介された。そしてムーアによって男山付近で採取された真竹がエジソンのもとへ送られた。結果は驚くべきものだった。男山の竹は約１０００時間も明かりを灯し続けたのである。以来、男山の竹はセルロースのフィラメントにとってかわる明治２７年(1894)までの約１０年間、「八幡竹（やはただけ）」の名で、エジソン電灯会社に輸出され、何百万個の馬蹄型フィラメントの白熱電球が作られ、全世界に明かりを灯し続けたのである。



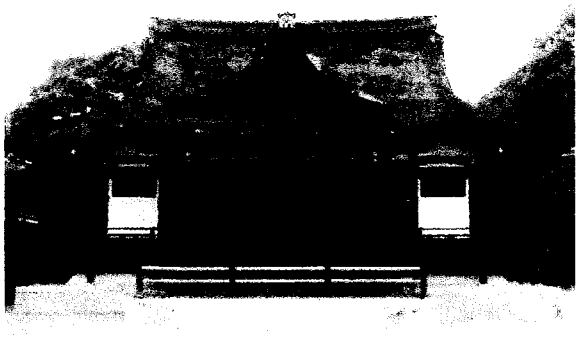
《竹フィラメントの電球》

なお、この記念碑は昭和３３年(1958)４月、現在地に移転された。また、昭和５９年(1984)には再建されて、今に至っている。

毎年２月１１日のエジソンの誕生日と１０月１８日の命日には、碑前に花を捧げ、日米両国の国旗を掲げて碑前祭が行われている。

★頓宮

京阪八幡市駅の南、一の鳥居をくぐると黒い門が見えてくる。門を入ると朱色の柱、緑の格子を持つ塀に囲まれた広場に出る。南側にも門（南門）があり、鮮やかな朱に塗られている。ここにある建物を頓宮（とんぐう）という。頓宮は「仮宮（かりみや）」あるいは「行宮（あんぐう）」ともいい、神や天皇の旅先での御座所（御旅所（おたびしょ））にあたる。また、本宮対して「下院」ともいう。



《頓宮》

毎年９月１５日の石清水祭では、応神天皇、神功皇后、比売大神の三神が本殿から神幸される場である。ここでは、午前４時ごろ、山頂から到着した三神が頓宮に祭られ、神馬の奉納など約３時間にわたって古式ゆかしい歳事が繰り広げられる。昔の頓宮前広場の様子は、今とかなり違っていたようだ。『空圓記』には、寛保２年(1742)に炎上した翌年、８代将軍徳川吉宗の命によって造営され、東方の低い箇所をとくに水から守るため、石垣を築いて高くした記録が残っている。

頓宮の別名に「疫神殿」という名があることは余り知られていない。疫病を防ぐ道饗（みちあえ）祭（現在の青山祭）に由来した名である。正月１８日、頓宮前庭に斎場を作り、四方に忌竹（いみだけ）を立て、注連縄を廻し、榊の八重垣を作って神を勧請した。そして相撲１７番、山上田楽舞楽などを奉納したため、京・大坂から諸人が大勢集まり、境内は見物人を目当てに紙細工や紙鯉を売る商人でにぎわった。現在の頓宮は、慶応４年(1868)の戊辰戦争で消失したのち、大正３年(1914)に再建されたものである。

《頓宮南門と男山》

頓宮南門は、慶應４年（明治元年[1868]）に鳥羽伏見の戦の兵火によって灰燼に帰し、以来約７０年間にわたり再建されることがなかったが、昭和１３年(1938)に山上本宮の

南総門が新築されたのに伴い、旧南総門が頓宮南門として移築され今日に至っている。

また、幕末まで頓宮を方形に囲んでいた回廊は、同じ戦火によりやはり失われたままだったが、明治維新１００年にあたる昭和４３年(1968)、その復元が企画され、昭和４５年(1970)に竣工した。ただし現在の回廊は、南辺と西辺南半分のみのＬ字形で、頓宮を完全に取り囲む形とはなっておらず、東辺と北辺東側部分は透塀、西辺北側と北辺西側部分は頓宮神饌所・参集所の建物に遮られた形となって途切れている。

なお、この回廊復元工事に先立って、それまで頓宮周囲に聳えていた多くの松の巨木が伐採されたが、この松並木は「鳥羽伏見の戦」当時、ここに駐屯し官兵として働いた筑後・久留米藩の軍勢が、回廊の焼け跡に土堤を築き、記念に植樹したものであったという。

★馬場前

頓宮南門からは二ノ鳥居まで約１２０m、広い平坦な参道が南へ真っ直ぐ延びており、このあたりを山上と同じく「馬場前(ばばさき)」と呼び習わしている。上院の馬場前は石畳の道だが、下院の方は踏み固められた白っぽい土の道になっている。右側には八幡宮の摂社・高良社の鳥居や境内などが見え、その背後に男山東斜面の森が迫っている。左側には頓宮駐車場の空地や放生川に架かる安居橋などがあり、その向こうに八幡の町並みが広がってる。

《馬場前》

この馬場前は、毎年正月には露天商が所狭しと並び、７月の高良社祭には八幡各区の屋形太鼓が勇壮に練り歩き、９月の勅祭・石清水祭には王朝時代の天皇行幸列が雅やかに再現される場になっている。

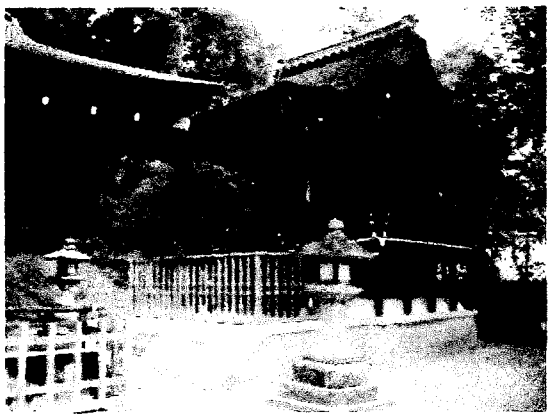
★高良神社

頓宮南門を出て馬場前(ばばさき)を少し進むと頓宮勤番所のあたりから直角に山手へと向う参道があり、「高良(こうら)神社」の額を掲げた石の鳥居が建っている。この鳥居をくぐって石段

《高良神社参道》

を上がると、左側にタブの巨木、正面に拝殿、右側に側面を向けた社殿が見える。これが石清水八幡宮の摂社であり、旧八幡町の氏神でもある高良神社である。

『男山考古録』などの史料によると、創建は貞観２年(860)６月１５日、また同１１年(869)との両説がある。社名は当初「河原社」と称されていたが、カワラ→カウラ→コウラと変化して「高良」の字をあてるようになったようだ。



《高良神社本殿》

御祭神は福岡県久留米市に鎮座する高良大社と同じく、神功皇后の海外御出陣のさい、住吉三神の神威をお鎮めしたという「高良玉垂命」だが、一説には武内宿禰命と住吉神の二座をお祀りしたものであるともいわれる。古くは同境内に「六所小神社」と総称される小さな祠や「四大神社」「松原社」などという祠も存在していたらしいが、明治以降は現在のように高良社一社のみとなっている。

高良社の社殿と拝殿は慶應４年（明治元年[1868]）「鳥羽伏見の戦」の兵火によって炎上し、御神体は一時上院の若宮社に遷座されたが、明治９年(1876)９月からは下院の頓宮殿内に安置され、同１０年に当宮の摂社に定められた。さらに明治１７年７月には頓宮殿裏手に再築された新社殿に遷座し、明治３９年(1906)１１月に旧地（現在地）に同社殿を移築、続いて御神体も同所に遷られ、今日に至っている。

なお、現在の社殿は大正４年(1915)４月に再築されたもので、参道の鳥居はかつて木造であったものを明治４０年(1907)１２月に石造に改めたものである。

高良神社の有名な逸話が、元徳３年(1331)、吉田兼好が著した『徒然草』に載っている。おおよそ次のような話である。

「ある日、仁和寺の法師が石清水八幡宮を詣でようと男山を訪れ、極楽寺等を詣でた。山麓にある神社に参詣を済ませ、さて帰ろうとしたとき、人々は山頂をめざして階段を登っていく。何だろうと思ったが、私は今回の旅の目的である石清水八幡宮に参詣を済ませたのだからと帰ってしまった。しかし、法師が詣でたのは高良社であって、石清水八幡宮は山頂にあることを知り、どんな小さなことでも、案内人は必要だと痛感した」というものだ。

石清水八幡宮は遷座当初から国家、皇室、さらに武家の守護神として尊崇されてきたためか、もっぱら地域の人々が心のよりどころにした氏神は高良神社であった。神社の例祭は毎年７月１７日、１８日に行われ、通称「太鼓祭り」として親しまれている。一時期途切れていた屋形太鼓の巡行が町の若衆によって復活し、本格的な夏を迎える町は

「ヨッサー、ヨッサー」のかけ声勇ましく、人々は祭り気分に酔いしれる。

★石清水八幡宮五輪塔

かつて石清水八幡の神宮寺であった神応寺総門の左手にあるのが通称「航海記念塔」とよばれる重要文化財に指定されている巨大な五輪塔である。

総高6．08m、幅2．44mで日本最大といわれている。石清水八幡宮の神宮寺だった旧極楽寺の境内に建立されたが、極楽寺が廃寺となって、この五輪石塔だけが残った。この五輪塔には次のような様々な伝承が残されている。

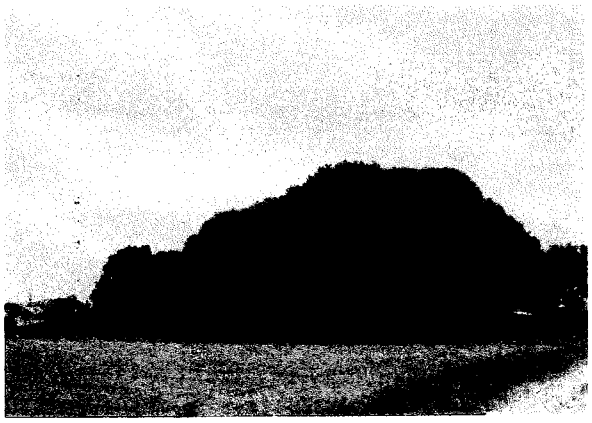
《石清水八幡宮（航海記念塔）》

①八幡大神を九州の宇佐八幡宮から勧請した大安寺の僧、行教の墓、②鎌倉時代末期、蒙古襲来に際して西大寺の僧、叡尊が石清水八幡宮で祈ったところ、神風が吹いて元軍が敗れ去り多くの死者が出たので叡尊がその供養をするため建立した、③平安時代の末期に摂津国、尼崎の豪商が入宋貿易帰途の海上で 大シケにあい、石清水八幡宮に祈り無事に帰国できたことを感謝し、承安年間（1171～1174）の間に建立したもので、以後、船乗りたちが航海の無事を祈願に訪れるようになったことから「航海記念塔」と呼ばれるようになった。

しかし、いずれも文献の裏づけはなく、石塔建立の起源や作者は不明である。

★大住車塚・南塚古墳

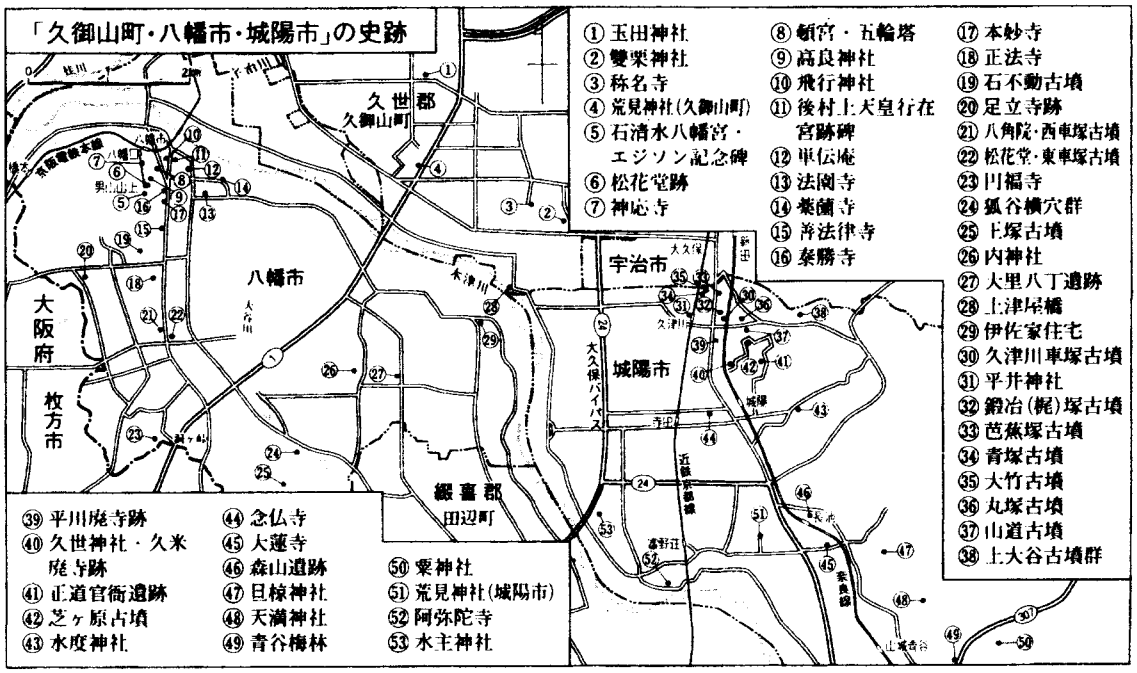
京田辺市大住に所在する大住車塚古墳は、５世紀初頭に造られた前方後方墳で、地元では「チコンジ山古墳」と呼ばれている。古墳のまわりには、長方形の周濠がある。主体部は、未発掘なので詳細は不明だが、竪穴式石室か粘土槨と考えられている。副葬品も不明である。

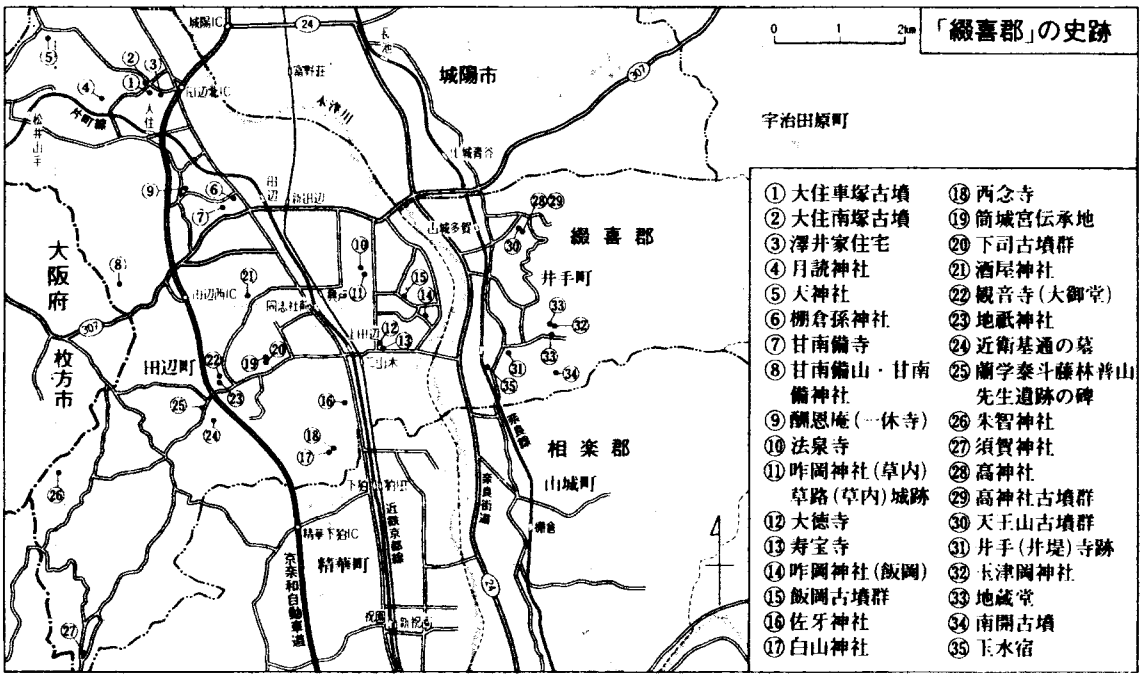


《大住車塚古墳》

車塚古墳は現状で、全長６６m、後方部一辺３０m・高さ4．5m、前方部幅１８m・高さ1．5mである。また、周濠は長辺が９８m、短辺６０mである。

車塚の南西側に並んでいるのが大住南塚古墳で、昭和６１年・６２年(1986･1987)に発


「久御山町・八幡市・城陽市」の史跡
久世郡
久御山町
八幡市
宇治市
城陽市
大阪府
枚方市
綴喜郡
田辺町
① 玉田神社
② 雙栗神社
③ 称名寺
④ 荒見神社(久御山町)
⑤ 石清水八幡宮・エジソン記念碑
⑥ 松花堂跡
⑦ 神応寺
⑧ 頓宮・五輪塔
⑨ 高良神社
⑩ 飛行神社
⑪ 後村上天皇行在宮跡碑
⑫ 単伝庵
⑬ 法園寺
⑭ 薬薗寺
⑮ 善法律寺
⑯ 泰勝寺
⑰ 本妙寺
⑱ 正法寺
⑲ 石不動古墳
⑳ 足立寺跡
㉑ 八角院・西車塚古墳
㉒ 松花堂・東車塚古墳
㉓ 円福寺
㉔ 狐谷横穴群
㉕ 上塚古墳
㉖ 内神社
㉗ 大里八丁遺跡
㉘ 上津屋橋
㉙ 伊佐家住宅
㉚ 久津川車塚古墳
㉛ 平井神社
㉜ 鍛冶(梶)塚古墳
㉝ 芭蕉塚古墳
㉞ 青塚古墳
㉟ 大竹古墳
㊱ 丸塚古墳
㊲ 山道古墳
㊳ 上大谷古墳群
㊴ 平川廃寺跡
㊵ 久世神社・久米廃寺跡
㊶ 正道官衙遺跡
㊷ 芝ヶ原古墳
㊸ 水度神社
㊹ 念仏寺
㊺ 大蓮寺
㊻ 森山遺跡
㊼ 日椋神社
㊽ 天満神社
㊾ 青谷梅林
㊿ 粟神社
(51) 荒見神社(城陽市)
(52) 阿弥陀寺
(53) 水主神社

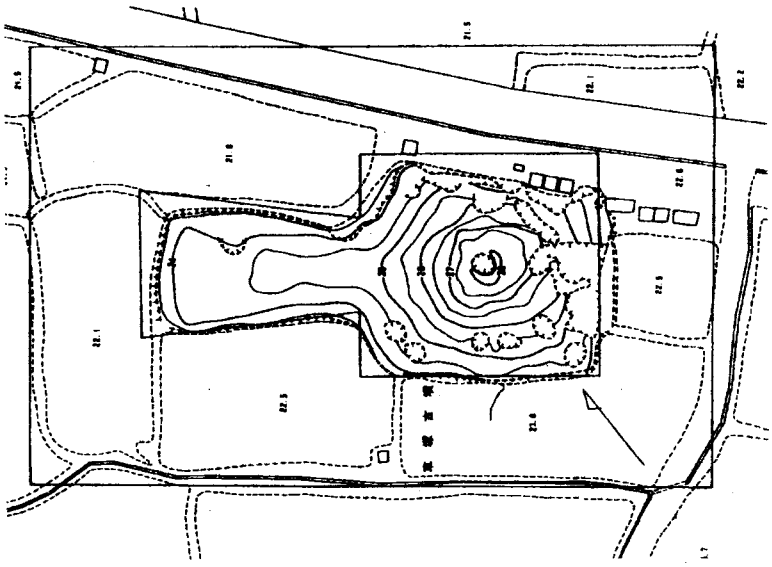

「綴喜郡」の史跡
城陽市
宇治田原町
綴喜郡
井手町
相楽郡
山城町
大阪府
枚方市
田辺町
精華町
① 大住車塚古墳
② 大住南塚古墳
③ 澤井家住宅
④ 月読神社
⑤ 天神社
⑥ 棚倉孫神社
⑦ 甘南備寺
⑧ 甘南備山・甘南備神社
⑨ 酬恩庵(一休寺)
⑩ 法泉寺
⑪ 咋岡神社(草内)草路(草内)城跡
⑫ 大徳寺
⑬ 寿宝寺
⑭ 咋岡神社(飯岡)
⑮ 飯岡古墳群
⑯ 佐牙神社
⑰ 白山神社
⑱ 西念寺
⑲ 筒城宮伝承地
⑳ 下司古墳群
㉑ 酒屋神社
㉒ 観音寺(大御堂)
㉓ 地蔵神社
㉔ 近衛基通の墓
㉕ 蘭学泰斗藤林普山先生遺跡の碑
㉖ 朱智神社
㉗ 須賀神社
㉘ 高神社
㉙ 高神社古墳群
㉚ 天王山古墳群
㉛ 井手(井堤)寺跡
㉜ 玉津岡神社
㉝ 地蔵堂
㉞ 南開古墳
㉟ 玉水宿

掘調査が実施された。その結果、４世紀末に造られた前方後方墳で、長方形の周濠があることが判明した。周濠の一部は現在でも池として残っている。

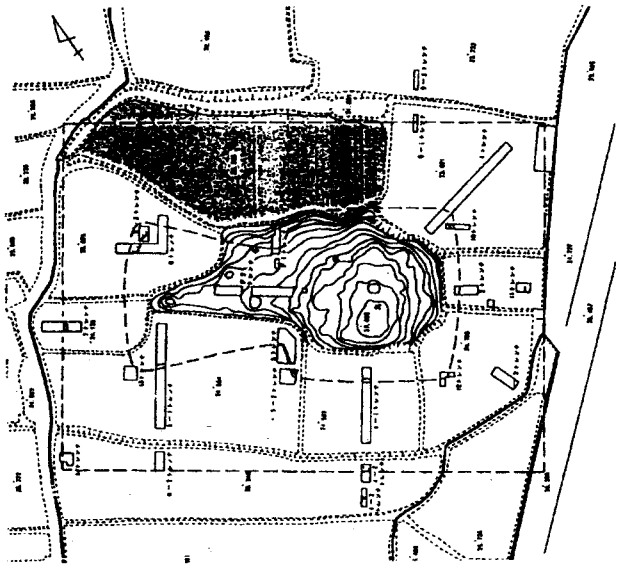
どちらの古墳にも葺石と埴輪が確認されている。ほぼ大きさの前方後方墳が近接して二つ並んでおり、非常に珍しいケースである。なお、伝承によれば、大住車塚古墳は継体天皇の皇子、菟皇子（うさぎのみこ）の墓で、南塚古墳は耳皇子（みみのみこ）の墓という。

昭和４９年(1974)６月１１日、国史跡に指定された。

《大住車塚古墳・南塚古墳墳丘実測図》



龍谷大学文学部考 古学資料室
『南山城の前方後円墳』（1972年）



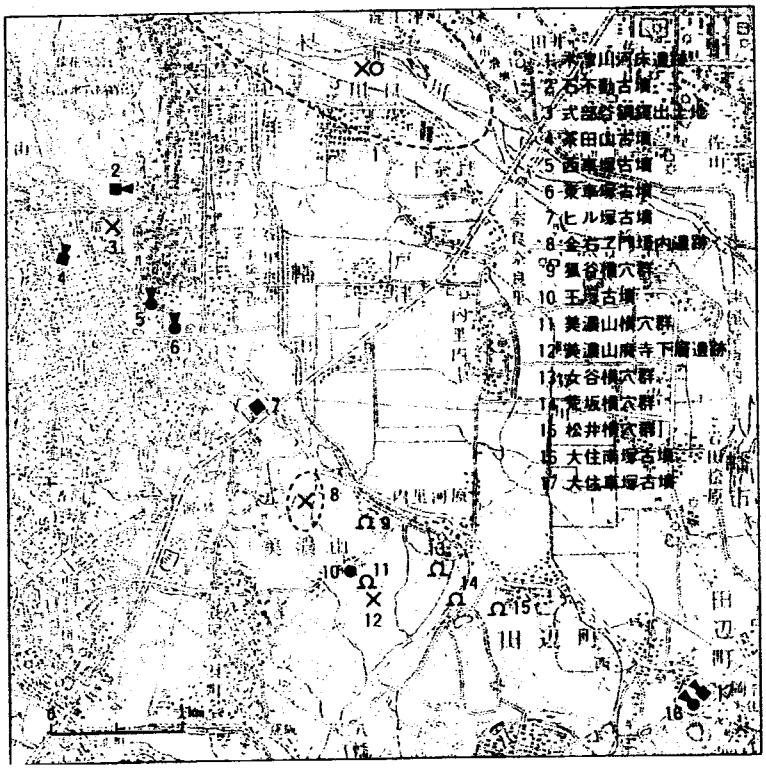
鷹野一太郎『大住 南塚古墳発掘調査概報』Ⅱ・
田辺町埋蔵文化財調査報告書７集（1987年）

★月読神社

月読神社は京都府京田辺市大住池平３１番地に鎮座する神社。主祭神は月読命で、伊邪那岐尊、伊邪那美尊を配祀する。

山城国綴喜郡の式内大社、月読神社に比定される。また、『神祇志料』は『三代実録』に載る樺井月読神とする。

鎮座地は大住郷（大隅郷）、古代の隼人の移住地に鎮座しているので、隼人によって祭祀された月読神と思われる。鹿児島県には現在でも「オツッドン」（御月殿）を祀る月神信仰が残っている。さらに海幸彦山幸彦神話は南九州の人々が伝えており、桂の木に降臨する山幸彦は、『山城国風土記逸文』に出てくる「月読尊が湯津桂の樹に依った」とあるのと合わせて考えると、日の神の孫の山幸彦とは月の神ともいえる。



《八幡市・京田辺市の主な史跡（『街道の日本史３２』より）》

《月読神社》

参道入口の鳥居右に「隼人舞伝承地」の高札があり、「九州南部の大隅隼人が７世紀頃に大住に移住し、郷土の隼人舞を天皇即位にともなう大嘗祭のときなどに朝廷で演じ、また月読神社にも奉納して舞い伝えてきた」と記している。また、鳥居脇には「隼人舞発祥の碑」の石碑も立っている。隼人舞は長らく廃絶していたが、志賀剛氏の指導によって、当地の保存会が復元した大住隼人舞・隼人踊りが、毎年１０月１４日の秋期例大祭で奉納される。

また、この地は宝生座発祥の地とされる。現在、宝生流は観世流に次ぐ第２の規模を誇る。重厚な芸風で謡を重視し、その独特の謡の魅力から「謡宝生」とも呼ばれる。現宗家は平成２０年(2008)４月に宗家を継承した宝生和英氏で、２０世になる。芸祖は観

阿弥の長兄、宝生太夫。大和猿楽の外山座の流れを汲む。外山座はその看板役者・宝生太夫の名を取って宝生座と呼ばれるようになった。

月読神社の境内には次のような記念碑が立っている。

「月読神社の神宮寺を宝生山福養寺といい、老松の茂る池には亀が遊んでいた。（今の大住中学校の地）この神社と寺に奉納した能楽座を宝生座（外山座とも）と称した。

平成二年二月建国記念の日

文学博士　志賀　剛　撰文　中西鋼二　書　下村信夫　建之」

《大住隼人舞》

★酬恩庵（一休寺）

京田辺市薪字里ノ内102番地に所在する臨済宗大徳寺派の寺院。一休宗純が住持をつとめ、その墓もあるため一般には「一休寺」と称される。本尊は釈迦如来。

この寺の前身は正応年間（1288年～1293年）、南浦紹明が開いた妙勝寺で、元弘年間（1331年～1334年）に兵火にあって衰退していたのを、康正2年(1456)、一休が草庵を結んで中興し、「酬恩庵」と号した。なお、金春禅竹が総門の前で一休のために能を演じたという。

江戸時代に入ると前田利常が伽藍を再興し、江戸幕府からは朱印状が与えられた。

本堂、室町時代の禅宗様仏殿で、方丈および玄関、庫裏、東司、浴室、鐘楼はすべて重要文化財である。また、木造休和尚坐像は方丈仏間に安置されており、一休の没年である文明1

《酬恩庵山門》

《紅葉の美しい酬恩庵本堂》

３年(1481)の作である。頭髪と髭を植え付けた跡があり、一休の遺髪を植えたと伝えられている。他に、絹本著色一休和尚像、後花園天皇宸翰女房奉書等多くの文化財がある。

また、庭園（方丈［公開］・虎丘庵［非公開］）は国指定名勝となっている。

なお、一休宗純の墓は現在、宮内庁管轄になっており、内部には入ることができないため、外からの拝観となる。

★酬恩庵の主建築

◇本堂

本堂は永享年間（１４２９～１９４１）に室町幕府６代将軍、足利義教の帰依によって建てられた。 本堂は、山城・大和地方の唐様建築中で、最も古い建造物で、重要文化財に指定されている。本堂の内部には本尊釈迦如来坐像および文殊・普賢菩薩像が安置されている。

◇唐門

唐門は、中門を入って右手にあり、欄間には獅子と鳳の彫刻がほどこされている。この門は、方丈へ通じる玄関になっている。慶安３年(1690)の方丈再建の時に新築されたもので、重要文化財である。

《方丈》

◇庫裡

中門（方丈への門）をくぐり、十数階の石段を下ると庫裏（くり）の入口に出る。庫裏とは台所のこと。その前に植えられているのは枝のたれさがった姿がめずらしい、「しだれ松」である。樹齢は約４００年という。庫裏の中に入ると正面に囲炉裏がある。左手奥に、かまどがあり、水瓶が置いてある。ひっそりとした庫裏の中は、黒々と拭きこまれ、夏でも涼しく感じられる。庫裏も慶安３年(1690)、方丈再建の時に改築されたもので、重要文化財である。

《東司》

◇東司

庫裏の手前、左側にあるこじんまりしたこの建物が東司（とうす）で、わかりやすくいうと、手洗いである。この東司もやはり重要文化財に指定されている。重文の手洗いは、全国でも数が少ない。同じく、方丈再建の時に新築されたものだ。

◇鐘楼

鐘楼は入母屋造り、２９㎡の建物で、はかま腰で背が高く、実に美しい姿である。下から仰ぎ見る屋根裏の構造は、力と美しさに満ちている。鐘銘には元和９年(1923)に建造されたと記されている。同じく重要文化財に指定されている。

《浴室》

◇浴室

室町時代の風呂は「蒸風呂」（現代の「サウナ」）で、おそらく昔は薬湯であったと考えられている。この浴室も重要文化財に指定されている。同じく方丈再建の時に改築されたものである。残念ながら内部は非公開である。

★酬恩庵庭園（方丈庭園）

酬恩庵の方丈は、加賀藩主前田利常が大坂夏の陣のさい木津川に陣を敷き、寺に参詣した時、寺の荒廃を嘆き、慶安３年(1650)に再建したもので、襖絵は狩野探幽の筆である。

方丈庭園は、江戸初期の造庭で文人、松花堂昭乗、佐川田喜六、石川丈山の合作と伝えられ、江戸時代初期の代表的な庭として国名勝に指定されている。南庭、北庭、東庭の三面からなる方丈庭園は、それぞれが異なった風情をかもし出しており、組み合わせの妙を感じさせる。

《南庭（上）と北庭（下）》

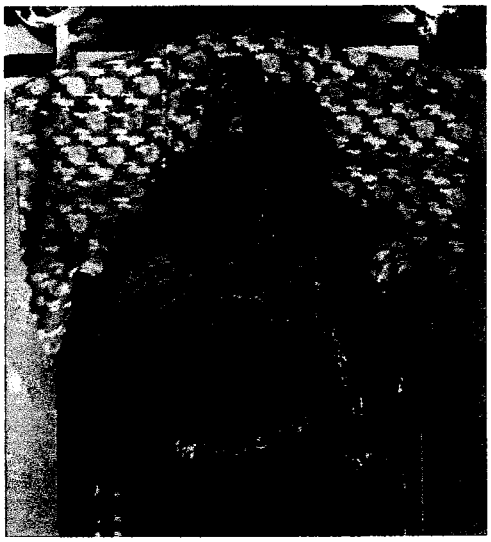
方丈の正面に広がる最も広い南庭は、サツキの刈り込みやサザンカ、ソテツなどが植えられており、刈り込みから軒下までは、きれいな白砂が敷き詰められている。当時（江戸時代初期）の典型的な禅苑庭園である。東庭は多くの庭石と刈り込みをふんだんに使い、十六羅漢の遊行するさまを表わしているという。北庭は、石塔や石灯籠、手水鉢などを配し、石組で枯れ滝を表現した、禅院枯山水の蓬莱庭園である。

★一休禅師木像・頂相

方丈中央の仏間には、一休禅師木像を安置している。この像は、一休が亡くなる前年

に弟子の墨済に命じてつくらせたもので、重要文化財に指定されている。

この木像は、一休が自分の頭髪とヒゲを抜いて植え付けた珍しいもので、像にはその跡が残っている。僧侶は頭をそる事が普通だが、一休はざんばら髪で、無精ひげをのばした姿だった。当時の禅僧はまるで貴族のような扱いを受けていたが、それとはおよそ縁遠い姿である。これは形式ばった禅林の規則をことさら避け、常に親しみ易い姿で人々に接したことの現れと考えられている。木像に自分の頭髪やヒゲを植えたのは、形にとらわれるのではなく、精神が大切であるという事を弟子をはじめ、多くの人々に伝えるためにされたものである。



《一休禅師木像》

宝物館には一休の頂相（ちんぞう）（禅僧の肖像画）が展示されている。一休の頂相は比較的多く残っているが、これはその中でもとくにすぐれたもので、重要文化財に指定されている。右足を曲げて、左足のもも上に組んで座っている。これは一種の「半跏坐」という姿勢といってもいいが、しかし、この姿はやや行儀の悪い姿勢だといえる。これは、一休が形式ばった禅林の規則をさけ、常に親しみやすい姿で人々に接したことの表れと考えられている。このような半跏像としての頂相は、一休の尊敬する師、華叟宗曇（かそうそうどん）の頂相（大徳寺・祥瑞寺）にもみられるものだ。

かみそりをあてず、ざんばら髪で、無精ひげをのばした顔つきは、およそ貴族化した当時の禅僧とは縁遠い姿である。単に表面的な似顔絵ではなく、性格はもとより精神を表したものと考えられている。

《一休禅師頂相》

☆一休宗純

一休宗純は、室町時代の臨済宗大徳寺派の禅僧である。「一休噺」のモデルとして有名である。

京都の生まれで後小松天皇の落胤とされる。菅原和長の日記『東坊城和長卿記』明応３年(1494)８月１日条に、「秘伝に云う、一休和尚は後小松院の落胤の皇子なり。世

に之を知る人無し」とある。

幼名は、後世史料によると千菊丸。長じて「周建」の名で呼ばれ、「狂雲子」、「瞎驢」、「夢閨」などと号した。戒名は宗純で、宗順とも書く。一休は道号である。

６歳で京都の安国寺の像外集鑑に入門・受戒し、周建と名付けられる。早くから詩才に優れ、１３歳の時に作った漢詩「長門春草」、１５歳の時に作った漢詩「春衣宿花」は洛中の評判となり賞賛された。

応永１７年(1410)、１７歳で謙翁宗為の弟子となり、戒名を宗純と改める。謙翁は応永２１年(1414)に没した。この時、一休は師の遷化によるものかは断定できないが、自殺未遂を起こしている。

《一休画像（重文）》

応永２２年(1415)に京都の大徳寺の高僧、華叟宗曇の弟子となる。『洞山三頓の棒』という公案に対し、「有ろじより 無ろじへ帰る　一休み　雨ふらば降れ　風ふかば吹け」と答えたことから、華叟より一休の道号を授かる。なお「有ろじ（有漏路）」とは迷い（煩悩）の世界、「無ろじ（無漏路）」とは悟り（仏）の世界を指す。

《「一休」華叟宗曇筆》

応永２７年(1420)のある夜、カラスの鳴き声を聞いて、にわかに大悟する。華叟は印可状を与えようとするが、一休は辞退した。華叟はばか者と笑いながら送り出したという。以後は詩・狂歌・書画と風狂の生活を送った。

正長元年(1428)、称光天皇が男子を残さず崩御し、伏見宮家より後花園天皇が迎えられて即位した。後花園天皇の即位には一休の推挙があったという。

応仁の乱後の文明６年(1474)、後土御門天皇の勅命により大徳寺の住持（第４７代）に任ぜられ、寺には住まなかったが、再興に尽力した。塔頭の真珠庵は一休を開祖として創建された。天皇に親しく接せられ、民衆にも慕われたという。

文明１３年(1481)、８８歳で酬恩庵に没した。臨終に際し、「死にとうない」と述べたと伝わる。酬恩庵は通称「一休寺」といい、京都府京田辺市の薪地区にある。康正２年(1456)に荒廃していた妙勝寺を一休が再興したものである。墓は酬恩庵にあり、「慈揚塔」と呼ばれる。宮内庁が御廟所として管理している陵墓であるため、墓所への一般の立ち入りと参拝はできないが、外からはある程度見ることはできる。

自由奔放で、奇行が多かったといわれる。以下のような逸話が伝わっている。

印可の証明書や由来ある文書を火中に投じた。

男色はもとより、仏教の戒律で禁じられていた飲酒＜肉食や女犯を行い、盲目の「森侍者（しんじしゃ）」という側女がいたり、「岐翁紹禎」という実子の弟子がいた。朱鞘の木刀を差すなど、風変わりな格好をして街を歩きまわった。親交のあった本願寺門主蓮如の留守中に居室に上がりこみ、蓮如の持念仏の阿弥陀如来像を枕に昼寝をした。その時に帰宅した蓮如上人は「俺の商売道具に何をする」という発言を残している。正月に、杖の頭にドクロをしつらえ、「ご用心、ご用心」と叫びながら練り歩いた。

《宮内庁管轄の一休宗純墓所》

こうした一見奇抜な言動は、中国の臨済宗の高僧として知られる普化など唐代の禅者と通じるものがあり、教義の面では禅宗の風狂の精神の表れとされる。と同時に、こうした行動を通して、仏教の権威や形骸化を批判・風刺し、仏教の伝統化や風化に警鐘を鳴らすものでもあった。彼の禅風は、直筆の法語として「七仏通誡偈」が残されていることからも伺える。

この戒律や形式にとらわれない人間臭い生き方は民衆の共感を呼び、江戸時代に彼をモデルとして一休噺に代表される頓知噺を生み出すもととなった。

《境内にいる一休さん》

また、一休は能筆で知られている。一休が村田珠光の師であるという伝承があり、茶人の間で墨蹟が極めて珍重された。なお、珠光の師という説は現在の研究ではやや疑わしいとされる。

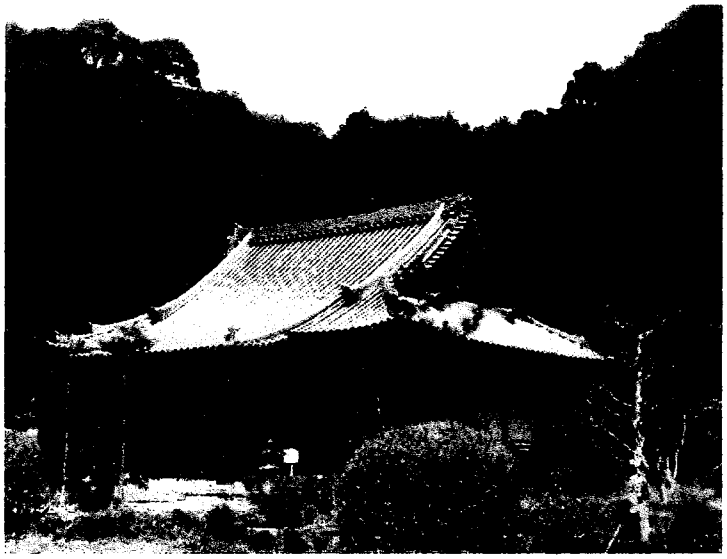
著書（詩集）は『狂雲集』『続狂雲集』『自戒集』『骸骨』など。東山文化を代表する人物でもある。足利義政とその夫人、日野富子の幕政を批判したことでも知られている。

★観音寺

京都府京田辺市普賢寺下大門１３番地に所在する真言宗智山派の寺院。山号は息長（おきなが）山。本尊は国宝十一面観音。通称を「大御堂（おおみどう）」という。

天武天皇の勅願により、法相宗の僧、義淵により創建された観心山親山寺が始まりと伝えられる。その後、天平年間（７２９年～７４８年）良弁が中興し、「息長山普賢教法寺」

と号し、十一面観音立像を安置したといわれる。そのさい奈良の東大寺の実忠が第１世として入寺したという。法相・三論・華厳の三宗を兼ね、七堂伽藍は壮麗を極めて「筒城(つつき)の大寺」と呼ばれた大寺院であったという。たびたび火災に遭い、藤原氏の援助によりその都度復興されたが、藤原氏の衰退とともに寺運も衰えた。



《大御堂　観音寺》

その後も幾度となく火災に見舞われ、永享９年(1437)の火事では、諸堂１３、僧坊２。０余りを数えた建物のほとんどが失われ、大御堂だけが再建されて今に至っている。

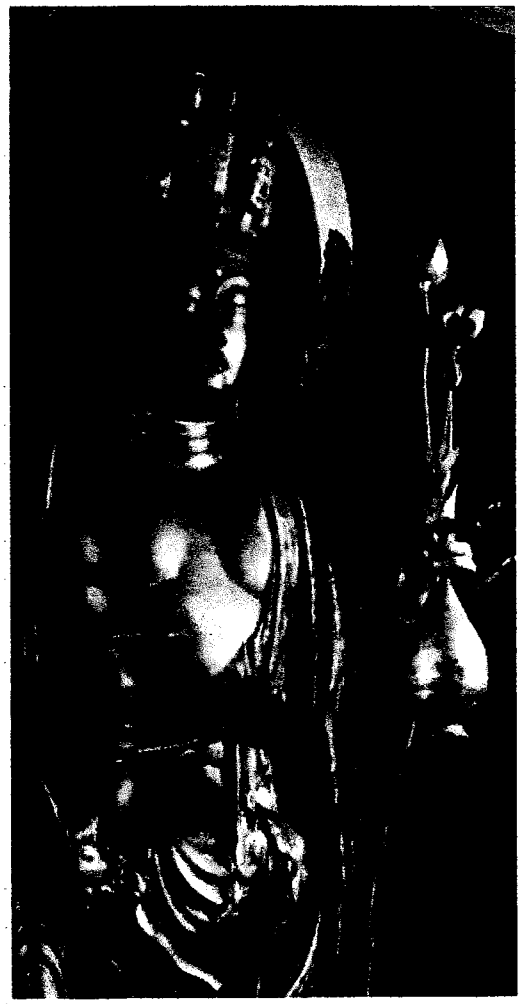
現在は、本堂と庭園が周囲の里山に調和し、美しい姿を見せており、春には参道の桜並木や一面に広がる菜の花が、秋には紅葉がひときわ目を引きく。

本尊の十一面観音立像は奈良時代の作で、京田辺市唯一の国宝（昭和２８年[1953]指定）である。顔立ちはとても柔和で、豊麗な健康美にあふれており、天平時代の華やかさを今に伝えている。

【井上靖「十一面観音」より】

それからちょうど一ヶ月を置いた二月の中頃、こんどは田辺町大字普賢寺の観音寺に、これまた高名な十一面観音を訪ねた。雨の日であった。小さい丘の裾にある小さいお堂で、まるで黒檀ででも造ったのではないかと思うくらい黒く光っている十一面観音に初めてお目にかかった。

室町時代のものだという厨子に収まっており、十一の仏面と水瓶（これは新しいもの）を持っている手に、やや金箔が残っているぐらいで、あ



《本尊の十一面観音立像》

とはすっかり剥げ落ちて黒漆の地が出てしまっている。顔も胸部も黒々と光っている。

同じ女身の十一面観音ではあるが、これから受ける感じは室生寺や法華寺の十一面とは少し異なっている。豊満な体躯にも、顔容にもどこかに未成熟な女性を持っている。あるいは、童子の持っている稚さと硬さが感じられ、それがまた別の美しさを出している。口をきりっと結び、少々顎が張っており、顎から胸部へかけても豊かな肉付けであるが、成熟した女性の姿ではなく、少年か少女の持つ硬さの ようなものがぴんと張った感じである。

この観音寺へ来て、初めて十一面観音というものが本来収まっているべきところに収まっているかのような思いを持った。

造られたのは古いが、その割りに損傷していないのは長く秘仏として、余り有名でない小さいお堂に祀られ、そして信心深い土地の人たちの手によって、守られていたからであろう。

☆十一面観音像

十一面観音は梵語名「エーカダシャ・ムカ」の意訳、文字通り「１１の顔」の意である。仏教の信仰対象である菩薩の一尊である。梵語名は観音菩薩の変化身の一つであり、六観音の一つでもある。玄奘訳の「十一面神咒心経（じゅういちめんしんじゅしんきょう）」にその像容が明らかにされているとおり、本体の顔以外に頭上に１１の顔を持つ菩薩である。

三昧耶形は水瓶、開蓮華。種子（しゅじ）（種字）はキャ（ka）、キリーク（hriiH）。「大光普照（だいこうふしょう）観音」とも呼ばれ、頭上の１１面のうち、前後左右の１０面は菩薩修行の階位である十地を表し、最上部の仏面は仏果を表すとされるが、これは衆生の十一品類の無明煩悩を断ち、仏果を開かしめる功徳を表すとされる。「救わで止（や）まんじ」の誓願を持つがゆえに、「大悲闡提（だいひせんだい）」とも呼ばれる。六観音の役割では、阿修羅道の衆生を摂化するという。

密教の尊格であり、密教経典（金剛乗経典）の十一面観自在菩薩心密言念誦儀軌経（不空訳）、仏説十一面観世音神咒経、十一面神咒心経（玄奘訳）に説かれている。十一面観自在菩薩心密言念誦儀軌経によれば、１０種類の現世での利益（十種勝利）と４種類の来世での果報（四種功徳）をもたらすといわれる。

《聖林寺の像》

《室生寺の像》

密教系の尊格であるが、雑密の伝来とともに奈良時代から

信仰を集め、病気治癒などの現世利益を祈願して十一面観音像が多く祀られた。観音菩薩の中では聖観音に次いで造像は多く、救済の観点からも千手観音と並んで観世音菩薩の変化身の中では人気が高かった。

伝承では、奈良時代の修験道僧である泰澄は、幼少より十一面観音を念じて苦修練行に励み、霊場として名高い白山を開山、十一面観音を本地とする妙理権現を感得した。平安時代以降、真言宗・天台宗の両教を修めた宗叡は、この妙理権現を比叡山延暦寺に遷座し、客人権現として山王七社の一つに数えられている。

《向原寺の像》

インドにおける作例は顕著なものは無い。唐の玄奘訳の「十一面神咒心経」が流布したことにより、中国および日本でさかんに造像された。

日本では、奈良時代から十一面観音の造像・信仰はさかんに行われ、法隆寺金堂壁画（昭和２４年[1949]の火災で焼損）中の十一面観音像が最古の作例とみなされる。奈良時代の作例としては他に聖林寺像（国宝、奈良県桜井市、大神神社の神宮寺の大御輪寺伝来）、観音寺像（国宝、京田辺市）、薬師寺像（重文、奈良市）などがある。東大寺二月堂の本尊も十一面観音であるが、古来厳重な秘仏であるため、その像容は明らかでない。同寺の年中行事である「お水取り」は、十一面観音に罪障の懺悔をする行事（十一面悔過法要）である。

十一面観音はその深い慈悲により衆生から一切の苦しみを抜き去る功徳を施す菩薩であるとされ、女神のような容姿に造られたものが多い。多くの十一面観音像は頭部正面に阿弥陀如来の化仏（けぶつ）を頂き、頭上には仏面（究極的理想としての悟りの表情）、菩薩面（穏やかな佇まいで善良な衆生に楽を施す、慈悲の表情。慈悲面とも）、瞋怒面（しんぬめん）（眉を吊り上げ口を「へ」の字に結び、邪悪な衆生を戒めて仏道へと向かわせる、憤怒の表情。忿怒面（ふんぬめん）とも）、狗牙上出面（くげじょうしゅつめん）（結んだ唇の間から牙を現わし、行いの浄らかな衆生を励まして仏道を勧める、讃嘆の表情。牙上出面あるいは白牙上出面とも）、大笑面（だいしょうめん）（悪への怒りが極まるあまり、悪にまみれた衆生の悪行を大口を開けて笑い滅する、笑顔。暴悪大笑面（ぼうあくだいしょうめん）とも）など、各々に複雑な表情を乗せ、右手を垂下し、左手には蓮華を生けた花瓶を持っている姿であることが多い。この像容は玄奘訳の「十一面神咒心経」に基づくものである。通例、頭頂に仏面、頭上の正面側に菩薩面（３面）、左側（向かって右）に瞋怒面（３面）、右側（向かって左）に狗牙上出面（３面）、拝観者からは見えない背面に大笑面（１面）を表わす。

《大笑面》

「十一面神咒心経」によれば、右手は垂下して数珠を持ち、左手には紅蓮を挿した花瓶を持つこととされている。ただし、彫像の場合は右手の数珠が省略ないし亡失したものが多い。一方、真言宗豊山派総本山長谷寺本尊の十一面観音像は、左手には通常通り蓮華を生けた花瓶を持っているが、右手には大錫杖を持ち、岩の上に立っているのが最大の特徴で、豊山派の多くの寺院に安置された十一面観音像はこの像容となっているため、通常の十一面観音像と区別して「長谷寺式十一面観音」と呼ばれる。

《道明寺の像》

空海によって伝えられた正純密教（真言宗）では、不空の訳経に基づく四臂（しひ）像も造像されたが、日本における作例は二臂（にひ）像が圧倒的に多い。

日本には国宝の十一面観音像が７体あり、前出の聖林寺・観音寺像以外では、法華寺像（奈良市）、室生寺像（奈良県宇陀市）、向原寺（こうげんじ）像（渡岸寺（どうがんじ）観音堂、滋賀県伊香郡高月町）、六波羅蜜寺像（秘仏、京都市東山区）、道明寺像（大阪府藤井寺市）がある。

★同志社大学歴史資料館

この資料館は平成８年(1996)２月にオープンした博物館相当施設である。

《歴史資料館展示室》

収蔵品は、歴代の考古学担当教授であった故酒詰仲男教授、森浩一名誉教授、現在の考古学担当の松藤和人教授を代表とする考古学資料室の全国をフィールドにした研究調査と、校地学術調査委員会による今出川・新町・京田辺の各キャンパスの発掘調査で収集された８５万点にのぼる考古資料や民俗・民族資料などから構成される。

また、京田辺キャンパスには天神山遺跡、下司古墳群、都谷中世居館群などの遺跡が保存されており、本館ではそれを公開して、教育・研究に活用されている。

★下司古墳群

下司古墳群は同志社大学京田辺キャンパス内に所在する。丘陵斜面に築造された古墳群で、現在８基の横穴式石室が確認されている。造営時期は出土遺物より７世紀前半ころと考えられている。

７号墳を除く古墳は同志社大学校地学術調査委員会によって、発掘調査が実施されている（昭和６０年[1985]）。過去の盗掘や石材抜取りにより石室が露呈しているものもあり、大きさや、内部構造については、ほぼ明らかとなっている。

《調査中の下司１号古墳》

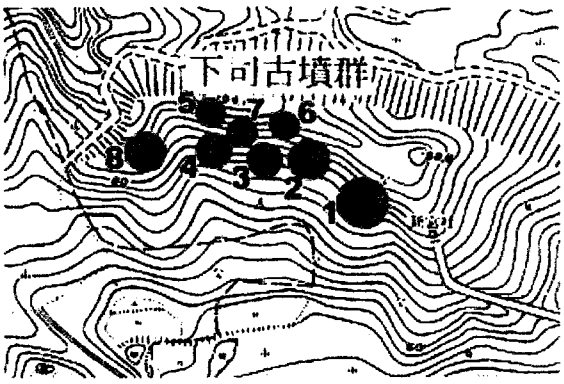
最大の規模を持つ１号墳は径２４ｍの円墳で、両袖袖式の横穴式石室を有する。石室の全長は8．55ｍ・玄室長3．55ｍ・奥壁幅2．05ｍ・高さ2．1ｍの規模で、陶棺片および金銅製鋲などが出土した。

２号墳は、石室・墳丘が良好に残り、棺の装飾として利用したとみられる六花形座金具をもつ鐶座金具が出土した。６号墳は全長2．45ｍと群中で最小規模である。

《古墳群中最小の下司６号墳石室》

７号墳は、古墳群の保存計画の中で、現状のままで保存が決定された古墳であり、墳丘に１箇所設けた試掘トレンチ（１ｍ×0．7ｍ ）により石室西壁の一部のみが確認されていた。そのため、詳細が未だ不明な７号墳を対象として、非破壊で位置および石室の規模を推定することを目的とし、平成２０年(2008) ２月と５月に地中レーダ探査が実施された。

その結果、幅約1．5ｍ、長さ約５ｍの石室と考えられる異常応答が認められた。推定された石室の大きさは、石室全長が不明な３、４ 号墳を除けば、１号、２号墳に次ぐ３番目の規模と予想されている。



《下司古墳群分布図》

なお、西側の支尾根には、同時期に築かれた大御堂裏山古墳がある。現在墳丘はすべて失われ、石室も半壊状態である。埋葬施設は南に開口する横穴式石室でその規模や

形態から下司２号墳と同じ設計プランで構築されたとみられ、下司古墳群と連動して築造されたものと考えられている。

これらの古墳の築造直後、まだ追葬が行われていた７世紀後半には、南西約５００mの地点に筒城寺（現在の観音寺）が建立されている。当古墳群の造墓集団に関わる氏寺と考えられている。古墳・氏族の関係を知る上で興味深い。

★継体天皇筒城宮伝承地と顕彰碑

京田辺市多々羅都谷に所在。現在は同志社大学田辺キャンパス内にある。

筒城宮（つつきのみや）は、越前から迎えられ樟葉宮（くずはのみや）（大阪府枚方市）で即位した継体天皇が、即位後５年から１２年（５１１年～５１８年）、弟国宮（おとくにのみや）に移るまでの７年間、宮が置かれたところである。

京田辺市郷土史会が、昭和３６年(1961)、筒城宮跡顕揚会を結成し、当時の明治神宮宮司、甘露寺受長氏の筆になる「筒城宮址」石碑を建てた。あわせて当時の会長、村田太平氏の筒城宮を讃える歌碑も副碑として建っている。

この周辺地名が「都谷」であるところから筒城宮の伝承地とされているが、むろん遺構が発見されているわけではない。

『日本書紀』によると、継体天皇は河内の樟葉宮に次いで、山背（やましろ）の筒城宮に宮を遷したという。また、その地は、仁徳天皇の皇后、磐之媛の故地とも伝えられている。しかし、考古学的には、筒城宮址の位置は不明であって、関係の遺跡が木津川沿いにあったという説も最近出されている。

《筒城宮址碑》

一方、「興福寺官務牒疏」に記載のある筒城寺が、現在の普賢寺大御堂を中心とする観音寺であって、筒木大寺や普賢寺址に関係することが知られている。これによって筒城宮の所在地を筒城寺の近接地に比定するが生まれた。昭和３年(1928)、三宅安兵衛氏の意志によって、浜田青陵博士の筆になるという「継體天皇皇居故趾」の碑が、多々羅の三軒屋に建てられた。

昭和３５年(1960)には、地名の都谷にゆかりを求めた地元の有志による筒城宮跡顕揚会が「筒城宮址」の碑を現在の同志社国際高校の敷地内に建立した。この建立に合わせて、先の「継體天皇皇居故趾」の碑も隣接地点に移設された。

さらに、昭和６１年(1986)、この石碑は地元の要望もあって、同志社大学構内の「不

動尊遺址碑」の脇に再度移設され、現在に至っている。

☆継体天皇

允恭天皇３９年(450?)～継体天皇２５年(531?)２月７日。

第２６代天皇で、在位は継体天皇元年(507?)２月４日～同２５年(531?)２月７日。

ヲホド王（現代仮名遣いではオオド王）と呼ばれる。継体天皇以降は、大和の勢力と越前や近江など北方の豪族の勢力が一体化し、ヤマト王権の力が強くなった。

別名として伝わるのは『古事記』（以下『記』）に「袁本杼命（おおどのみこと）」、『日本書紀』（以下『紀』）に「男大迹王（おおどのおおきみ）」「彦太尊（ひこふとのみこと）」、『筑後国風土記』逸文に「雄大迹天皇（おおどのすめらみこと）」、『上宮記』逸文に「乎富等大公王（おおどのおおきみ）」とある。 なお、隅田八幡宮《継体天皇像(福井市足羽山)》（和歌山県橋本市）蔵の人物画像鏡銘（４４３年説と５０３年説）にみえる「孚弟王（男弟王？）」は継体天皇を指すとするのが定説である。

《継体天皇イメージ》

『古事記』『日本書紀』（以下、記紀）によると、継体天皇は応神天皇５世の孫であり、父は彦主人王（ひこうしのおおきみ）。近江国高嶋郷三尾野（現在の滋賀県高島市あたり）で誕生したが幼い時に父を亡くし、母の故郷である越前国高向（たかむく）（現在の福井県坂井市丸岡町高椋）で成長した。

『紀』によれば、５０６年に武烈天皇が後嗣を定めずに崩御したため、大連の大伴金村らが越前に赴いて男大迹王を大王に推戴した。これを承諾した王は翌年５８歳で河内国樟葉宮（くずばのみや）で即位。武烈天皇の姉（妹との説もある）にあたる手白香皇女（たしらかのひめみこ）を皇后とした。５２６年、大倭（後の大和国）に都をおいた。その直後、継体は百済救援の軍を送ったが、新羅と結んだ磐井により、九州北部で磐井の乱が勃発し、その平定に苦慮している（磐井の乱については諸説ある）。

しかし、この記述では、継体が５０７年に即位してから大和に都をおくまで約２０年もかかっており、天皇家（実態はヤマト王権）と周辺の豪族の間での混乱があったと考える説もある。

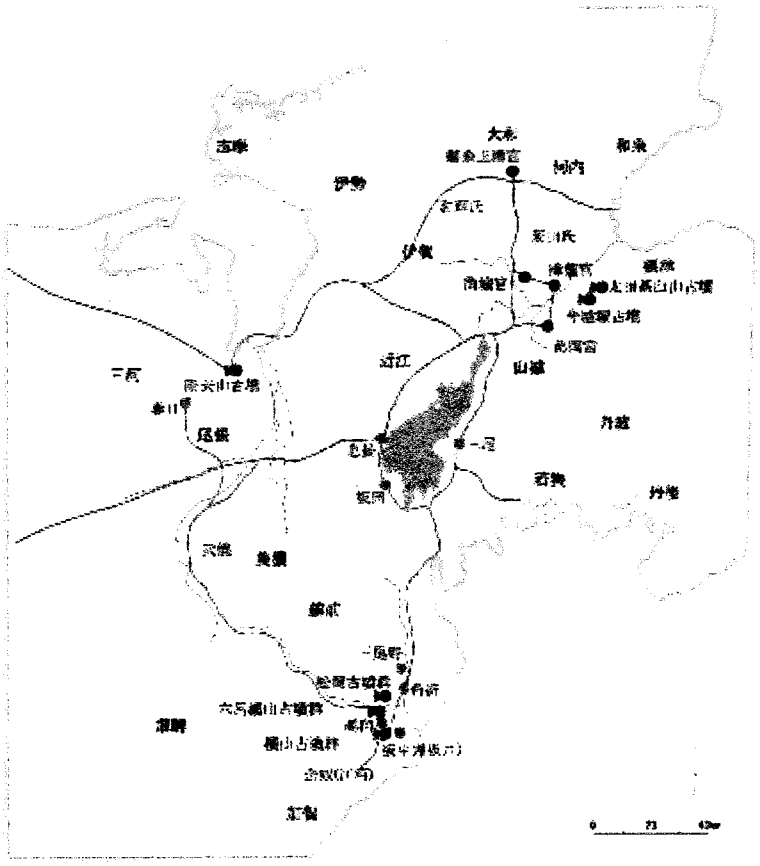
５３１年に後継を皇子の勾大兄（安閑天皇）に譲位（記録上は最初の譲位例）し、その即位と同日に崩御した。また『紀』では、『百済本記』（「百濟本記爲文　其文云　大歲辛亥三月　軍進至于安羅　營乞乇城　是月　高麗弑其王安　又聞　日本天皇及太子皇子

俱崩薨　由此而言　辛亥之歳　當廿五年矣」）を引用して、天皇、太子、皇子が同時に死んだとの説を紹介し、何らかの政変によって継体自身が殺害された可能性もある（「辛亥の変」説）。また、『記』では没年を527年としている。

『記』には次のようにある。

「品太王の五世の孫、袁本杼命、伊波礼の玉穂宮に坐しまして、天の下治らしめしき。

この御世に竺紫君石井、天皇の命に従わずして、多くの礼無かりき。故、物部荒甲の大連、大伴金村の連二人を遣わして、石井を殺したまひき。天皇の御歳、四十三歳〔丁未の年の四月九日に崩りましき〕。御陵は三島の藍の御陵なり」



《継体天皇関係図（南北逆）》

記紀によると、先代の武烈天皇に後嗣がなかったため、越前（近江とも）から「応神天皇５世の孫」である継体天皇が迎えられ、群臣の要請に従って即位したとされる。しかし、『日本書紀』の系図一巻が失われたために正確な系譜が書けず、『上宮記』逸文によって辛うじて状況を知ることができる。しかし、この特殊な即位事情をめぐっては様々の議論がある。

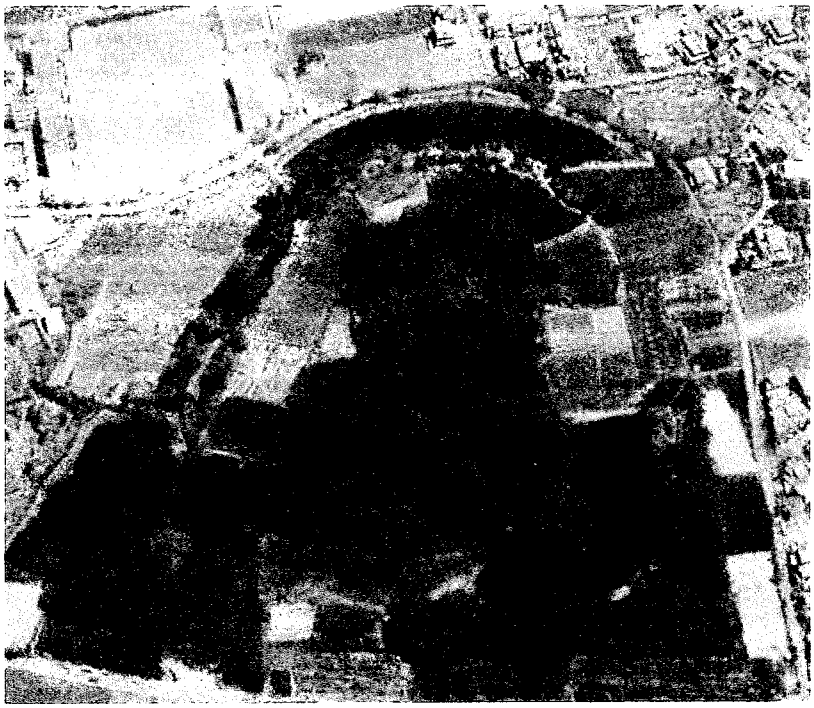
記紀の記述を尊重して、継体天皇を大王家の「遠い傍系に連なる有力王族」とする旧来の説があった。しかし戦後に、歴史とりわけ天皇に関する自由な研究が認められることになったことから、継体は従来の大王家とは血縁のない「新王朝の始祖（初代大王）」とする説（水野祐「三王朝交代説」）が提唱された。

この説によれば、いわゆる万世一系は否定され、出自不明の第２６代継体天皇から新たな大王家が始まる。さらに論を進め、近江の皇別氏族（皇族が臣籍降下して誕生した氏族）息長氏の出身と見なし、大和王権を武力制圧して王位を簒奪したとする説も出された。

近年では、継体以前には大王の地位は特定の血縁に固定されなかっとするた説も強い。つまり、継体を含め祖先の異なる複数の豪族があり、祖先が誰かは分からないという意味である。武光誠は、継体以前の大王は複数の有力豪族から出たとしている。また武光によれば、武烈天皇などは実在した天皇ではなく、応神天皇の実在に関しても諸説ある、としている。

《継体天皇陵に治定されている太田茶臼山古墳（茨木市）》

ところが1980年代に入り、継体の出自を伝える『上宮記』の成立が推古朝に遡る可能性が指摘されて（黛弘道「継体天皇の系譜について」『律令国家成立史の研究』吉川弘文館、昭和５７年[1982]）、傍系王族説が再び支持を集めるようになった。すなわち『上宮記』逸文が載っている『釈日本紀』には「上宮記曰一伝」という記述があるが、『上宮記』の作者は別史料を引用している。それには、真偽は不明であるが、さらに古い資料に基づいた王権系譜が載っていたというものである。現在の歴史学界では、継体天皇が応神天皇の５世孫かどうかは不明とするが、中央豪族の支持を得て即位したのは事実とする説が有力である。なお、継体以降の天皇系譜については、記紀の記録もある程度は信用できる。



《真の継体天皇陵といわれる今城塚古墳（高槻市）》

★穴山梅雪翁墓

《穴山梅雪翁墓》

京田辺市飯岡(いのおか)の共同墓地に残る五輪塔。

梅雪は甲斐武田家の武将で、母親は武田信玄の姉、南松院。天正１０年(1541)に徳川家康に属し、のちに織田信長に降ったといわれる。泉州堺にいたとき、本能寺の変が起こり、急遽帰国の途中に田辺町内で殺害されたとの有力な説があり、飯岡の人たちが手厚くここに葬ったという。

一説には、普賢寺谷で梅雪の従者が、道案内人を殺し、その太刀の銀製の鍔(つば)を奪ったことから、土着民が蜂起し、梅雪が木津川を渡る前に殺害されたとの伝説がこの里に伝わっている。

☆穴山信君（梅雪）

《穴山梅雪像》

天文１０年(1541)～天正１０年(1582)６月２日

穴山信君(あなやまのぶきみ)（梅雪(ばいせつ)）は、戦国時代の武将。

天文１０年(1541)、穴山信友の嫡男として生まれる。幼名は勝千代。母は武田信虎の娘で武田信玄の姉、南松院。妻の見性院は武田信玄の娘。壮年期に出家し、「梅雪斎不白(ばいせつさいふはく)」と号した。武田左衛門とも称する。武田二十四将の一人に数えられる。

穴山氏は信玄の代以前から武田一族として優遇された。代々武田氏と婚姻関係を結ぶ親族衆の重鎮であり、武田姓の使用を許される名門であった。下山城（現在は本国寺）を居城とし、河内地方（甲斐国巨摩郡南部地域［現在の南巨摩郡身延町周辺］）、西八代郡の一部（現在の南巨摩郡身延町下部近辺）の他に巨摩郡北部の穴山（現在の韮崎市中田町および穴山町周辺）等を領地とした。巨摩郡南部地域、八代郡には武田宗家より独立した、穴山氏により独自に運営される金山もっていた。

川中島の合戦など、信玄による主要な合戦に参加している。永禄１２年(1569)、武田氏が駿河をめぐり後北条氏と対立したさいには、武田軍本隊が甲斐に退却した後も横山城に踏み止まり、武田氏が駿河へ再侵攻する足掛かりとなった。のちに山県昌景の後任として江尻城代となる。俗に駿州探題。江尻城に城下町を形成し、輸送ルートを整備して商業政策を進めるなど、内政手腕に優れていた。また、外交にも多く携わった。

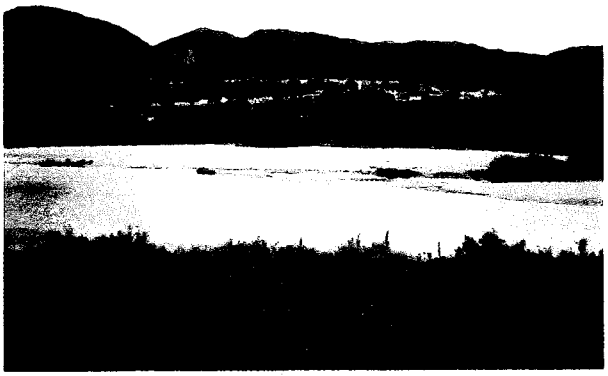
信玄の死後、従兄弟の武田勝頼とは対立が絶えず、長篠の戦いの際には勝手に戦線を離脱。『甲陽軍鑑』によると、これに怒った高坂昌信が勝頼に信君を切腹させるべきだと意見したが、親族衆の重鎮である信君を処断することで家中が分裂することを恐れ、勝頼はその意見を退けたとされる。

天正１０年(1582)、織田信長の甲斐侵攻による土壇場に至って勝頼を裏切り、徳川家康を通じて信長に内応した（数年前から徳川との接触があったとする説もある）。一説に旧領の安堵（河内・江尻領）、および武田家の存続を条件に内応したと伝えられている。

裏切りの原因については、勝頼との対立の他に、かつての武田義信によるクーデター事件が関係しているとも（弟信邦は義信側に味方したことにより自害）、妻の見性院が諏訪氏の血を引く勝頼よりも、自らが生んだ穴山信治（勝千代）の方が武田家当主に相応しい（信治は武田氏の血を３／４継いでいる）と夫に勧めたためだともいわれるが、いずれにせよ確証はない。ともかく、信君の裏切りは武田諸将に衝撃を与え、武田氏滅亡の一因となったのは確実である。

武田一族にも関わらず土壇場で勝頼を裏切ったことから、同じく信玄の娘婿でありながら織田家に寝返った木曽義昌や滅亡寸前に裏切った小山田信茂らとともに否定的評価がある一方で、佐藤八郎など家名存続のため敢えて背いた情勢判断を正当視する好意的評価や、矢野俊文による武田氏と国人領主の穴山や小山田の関係が連合政権であるとする立場から、滅亡に際して個別領主の立場から離反に至ったとする見解もある。

戦後は信長から所領を安堵されたので、御礼を言上するため家康とともに上洛した。堺（大阪府）を遊覧していた際に本能寺の変が起こったため、急ぎ甲斐に戻ろうとしたが、『三河物語』によると、金品を多く持っていた信君一行は、家康従者に強奪されることを恐れて別行動をとったともいわれ、山城国綴喜郡の草内の渡し（飯岡（いのおか）の渡し）付近（京都府京田辺市の山城大橋近く）で落ち武者狩りの土民に襲撃されて殺害されたとされる。



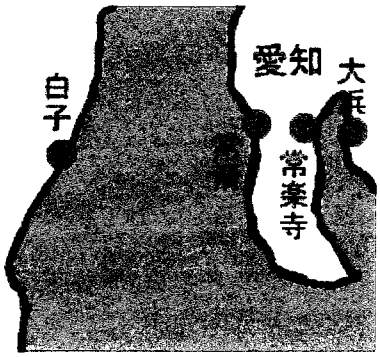
《現在の草内の渡し（飯岡の渡し）》

一説に徳川家康が命じて殺したというが、変後には嫡子信治に家督を継承させており、また、妻の見性院も丁重に遇されている。当時、家康自身の命が危険だった状態であり、他人の暗殺など考える暇があったとは考えられず、信憑性に乏しい。

なお、穴山氏は、嫡男である穴山勝千代（武田信治）が天正１５年(1587)に急死したため断絶した。

☆神君伊賀越え

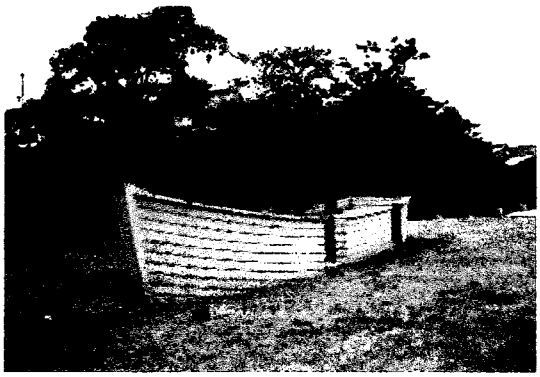
《神君伊賀越えルート》



伊賀越えは、畿内より東国へ行く際に伊賀国（三重県）を経由して行くことを指す。鈴鹿峠が開かれる前は主に東海道が走る加太（かぶと）峠を経由していた（加太越）。

天正１０年(1582)６月２日早暁の本能寺の変に際し、徳川家康が明智光秀の軍や混乱に乗じた暴徒などとの遭遇を回避するために、滞在先の堺（大阪府堺市）からわずかの供回りを連れて伊賀国の険しい山道を経て、伊勢国白子（三重県鈴鹿市）または伊勢国浜村（三重県四日市市）の何れかから海路で領国の三河国大浜（愛知県碧南市）へ戻り、岡崎城へ帰還した。江戸時代には家康の神格化に伴い伝説となった。

本能寺の変に先立って上方を遊覧していた徳川家康は、この日、信長への御礼言上のため堺の松井友閑屋敷を発って京都へ向かっていたが、河内国飯盛山付近でこの変報に接した（ただし、場所については異説あり）。



《飯岡の公園にある復元渡し船》

この時点で家康に同行していた面々は、軍勢もなく平服ではあったが、酒井忠次、石川数正、本多正信、本多忠勝、榊原康政、井伊万千代（後の直政）、天野康景、大久保忠佐・忠隣、高力清長、服部半蔵、渡辺半蔵、鳥居忠政、長田伝八郎（永井直勝）といった錚々たるメンバーであった。これに、信長から案内役として付けられた長谷川秀一（竹丸）、家康に従ったばかりの駿河国江尻城主、穴山梅雪、京都から急ぎ変報を届けてきた茶屋四郎次郎清延がいた。

家康は報せを聞き驚愕、やがて「弔い合戦をしたくてもこの人数、土民の槍に掛かって果てるよりは京都知恩院に入ってそこで腹を切ろう」と一旦は死を決意するが、本多忠勝が一人反対して「信長公への報恩は、何としてでも本国へ戻り、軍勢を催して明智を誅伐すること」と力説、家康はじめ一同もこれに同意したと伝えられる。

その後、帰還についての相談となったのだが、一丸となって行動するかと思いきや、穴山梅雪主従１２名は別行動を取った。梅雪が家康を警戒したのか、何か別の策があったのか、両者が別行動をとった理由は諸説あるが、定かではない。そこで家康は梅雪に別れを告げ、一路三河へと急ぎに急いだ。この家康の三河までの苦難の道中が世に名高い「神君伊賀越え」である。

遅れて出発した梅雪は、家康一行が渡河した後、木津川にさしかかったが、草内の渡し（飯岡（いのおか）の渡し）付近で土民の襲撃を受け、落命することになるのである。

★飯岡車塚古墳と飯岡古墳群

飯岡（いのおか）は木津川左岸に臨む標高６７ｍの低丘陵である。周囲に遮るものがないので木津川中流域一帯の景観を望むには最適である。

古くは「咋岡（くいおか）」と称したが、「く」がとれて「いおか」となり、後に「飯」の字をあてて「いのおか」と称するようになったと伝えられる。また、一説に「湯岡（ゆのおか）」ともいい、清泉の湧き出す岡から地名になったともいわれている。今も飯岡の周辺には桜井王（さくらいおおきみ）（継体天皇の孫）が掘らせたという七つの井戸が残っている。民家は主に丘陵の東北部にあり、南方から西方には多くの古墳が散在しているが、農地（主に茶畑）や宅地開発が進んで破壊された古墳も少なくない。

《飯岡丘陵遠景》

飯岡車塚古墳は古墳時代前期後半（４世紀後半）に築造された、京田辺市内最大の前方後円墳である。全長９０ｍ、後円部直径６０ｍを測る。明治３５年(1902)に後円部が発掘され、棺を納めた竪穴式石室から勾玉、管玉、小玉、石釧、車輪石、鍬形石、石製小型坪、刀剣片などが発見されたが、銅鏡が含まれていないので、それ以前に盗掘されていたとみられている。

古墳の表面は、葺石で覆われ、周りには埴輪に立てられている。埴輪の中には楕円筒埴輪があることが、昭和５１年(1976)の発掘調査で判明している。

木津川の水運に関係した人物の墓と考えられているが、地元には、宣化天皇の皇子（継体天皇の孫）、上殖葉王（かみのえばのみこ）の墓との伝承があり、

《飯岡車塚古墳前方部》

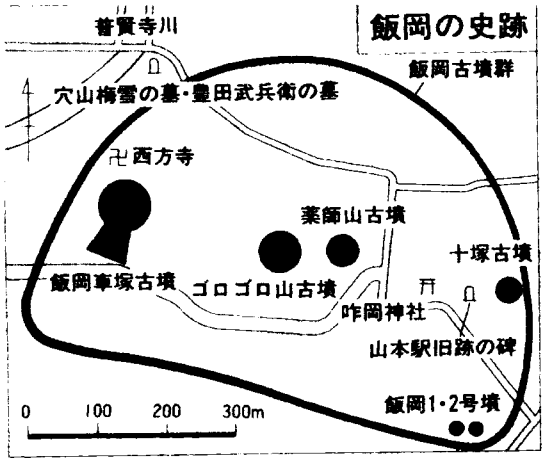
墳丘に「上殖葉王古墳」の石碑が立っている。

ゴロゴロ山古墳は「茶臼塚」「釈迦山古墳」とも呼ばれている。飯岡丘陵のほぼ中央、頂上近くに位置する古墳時代中期のもので、南山城地方最大の円墳（前方後円墳とする説もある）である。直径は６０ｍ、高さは９ｍ。墳丘頂部は直径２０ｍの平坦地になっている。葺石の存在もあり、北東部には濠がめぐっていた跡がある。盗掘にあい遺物は残っていないといわる。伝承では継体天皇の椀子王（まりこのみこ）の墓といい、墳丘には「椀子王古蹟」の碑が立っている。継体天皇の筒城宮に近いところからこうした伝説になったものと思われる。

《ゴロゴロ山古墳》

薬師山古墳は「桜井古墳」ともいう。直径３８ｍの円墳で、古墳時代中期の築造と推定されている。継体天皇の皇子、椀子王の子にあたる桜井王（さくらいのおおきみ）の墳墓と伝えられる。墳丘上には江戸期の石仏を安置している。

十塚（とづか）古墳は直径約２０ｍの円墳で、古墳時代中期の築造と推定されている。この古墳からは神人車馬画像鏡（熊本県の江田船山古墳出土のもの［国宝］が有名）、神人歌舞画像鏡、変形一神四獣鏡の銅鏡３面が出土したほか、勾玉・管玉、馬具など多数が副葬品として出土している。このうち神人車馬画像鏡等は、明治７年(1874)に発掘され、現在、京都国立博物館に保管されている。神人車馬画像鏡の内区には、道教の神西王母と従者、四頭立て車馬と二頭立て車馬出行、山岳などの画像がみられるほか、銘文に「口氏作鏡四夷　多賀国家人民息…（以下略）」が記されている。



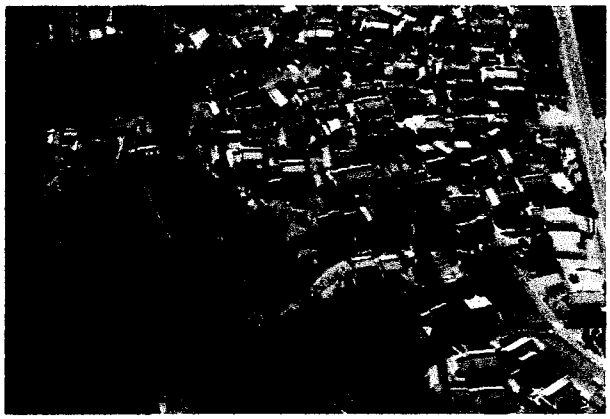
他にも飯岡には、中期の弥陀山古墳（地蔵山古墳・朱大王（あけのおおきみ）古墳、直径２５ｍの円墳）、後期の東原古墳、飯岡横穴１・２号墓等があり、古墳時代を通じて多くの古墳が造られた。

★椿井大塚山古墳

椿井大塚山（つばいおおつかやま）古墳は、京都府木津川市山城町椿井に所在する古墳。築造期は３世紀末で、山城地方最大規模の前方後円墳である。

破壊が進んでおり、本来の規模については未だよく分かっていない。後円部はＪＲ奈良線によって分断されている。

墳丘は全長約175m、後円部は直径約110m、高さ20m、前方部は長さ約80m、高さ約10mと推定されている。前方部が鉢形に開き、周濠が認められていない。水をたたえていない大型の前方後円墳は畿内では稀である。古墳は山塊の中に造営され、盛土も部分的に行ったもの。墳丘の大部分は自然地形の高まり、つまり、「山」を利用しているので、山と一体化し、山の一部になりきっている。このような造り方は、古い古墳に多い。



《上空から見た椿井大塚山古墳》

埋葬施設は、定型化した竪穴式石室に長大な割竹型木棺を使用している。

小林行雄は、三角縁神獣鏡を分類して七つの型式に大別した場合、この古墳の出土品では最古型式から4番目までの新しい鏡が含まれていたので、3世紀末とされてきた。しかし、近年では、若干遡り、3世紀中葉過ぎではないかといわれている。

京都大 学文学部考古学研究室『椿井大塚山古墳と三角縁神獣鏡』(1989年)

《椿井大塚山古墳墳丘実測図》

昭和28年(1953)、国鉄奈良線の拡幅工事の際に竪穴式石室が偶然発見され、当時最多の三角縁神獣鏡32面が出土した。また、内行花文鏡2面、方格規矩鏡1面、画文帯

神獣鏡１面など計３６面以上の鏡と武具が出土した。

３６面以上というのは、他の鏡の破片数点が出ているのと盗掘で行方不明になったものがあった可能性が出てきたためである。多数の銅鏡を棺の中に入れる習俗が古墳時代前期には西日本や中部地方で急速に拡がった。それらの鏡が、短期間にほぼ同一場所・地域で製作されたと推定されている。また、日本最古の刀子も出土している。

武器・武具では、鉄刀７本以上、鉄剣十数本以上、鉄矛７本以上、鉄族約２００本、銅族１７本、鉄製甲冑１領が、工具・農具では、鉄鎌３本、鉄斧１０個、鉄刀１７本、鉄製ヤリカンナ７本以上、鉄錐８本以上、鉄ノミ３本以上が、漁具では、鉄銛十数本、鉄ヤス数本、鉄製釣針１本が出土している。このほか、鉄製冠の可能性のある鉄製品が出土している。

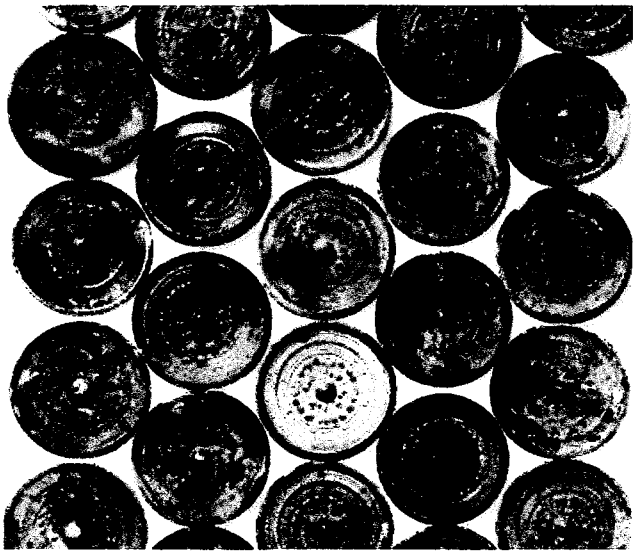
《発掘された竪穴式石室》

この古墳は、淀川を遡り木津川の右岸にある。副葬品として、縄文時代からの漁具である銛、ヤス、釣針が揃って出土していること。南西に船戸という地名があること。以上から、この古墳の被葬者は船舶の管理者であり、津（港）の管掌者ではなかったかと推測されている。

《後円部と周壕》

平成１２年(2000)９月６日、国史跡に指定された。

なお、古墳から出土した三角縁神獣鏡は、京都大学博物館に移されているが、棚倉駅近くの山城町総合文化センター「アスピアやましろ」に併設された「椿井大塚山古墳と三角縁神獣鏡特別展示室」で、神獣鏡のレプリカを展示されており、自由に見学できる。



《出土した三角縁神獣鏡》

☆木津川（泉川）

木津川は、三重県と京都府を流れる淀川水系の支流で一級河川で、総延長は

《南山城地方の前方後円墳編年表》

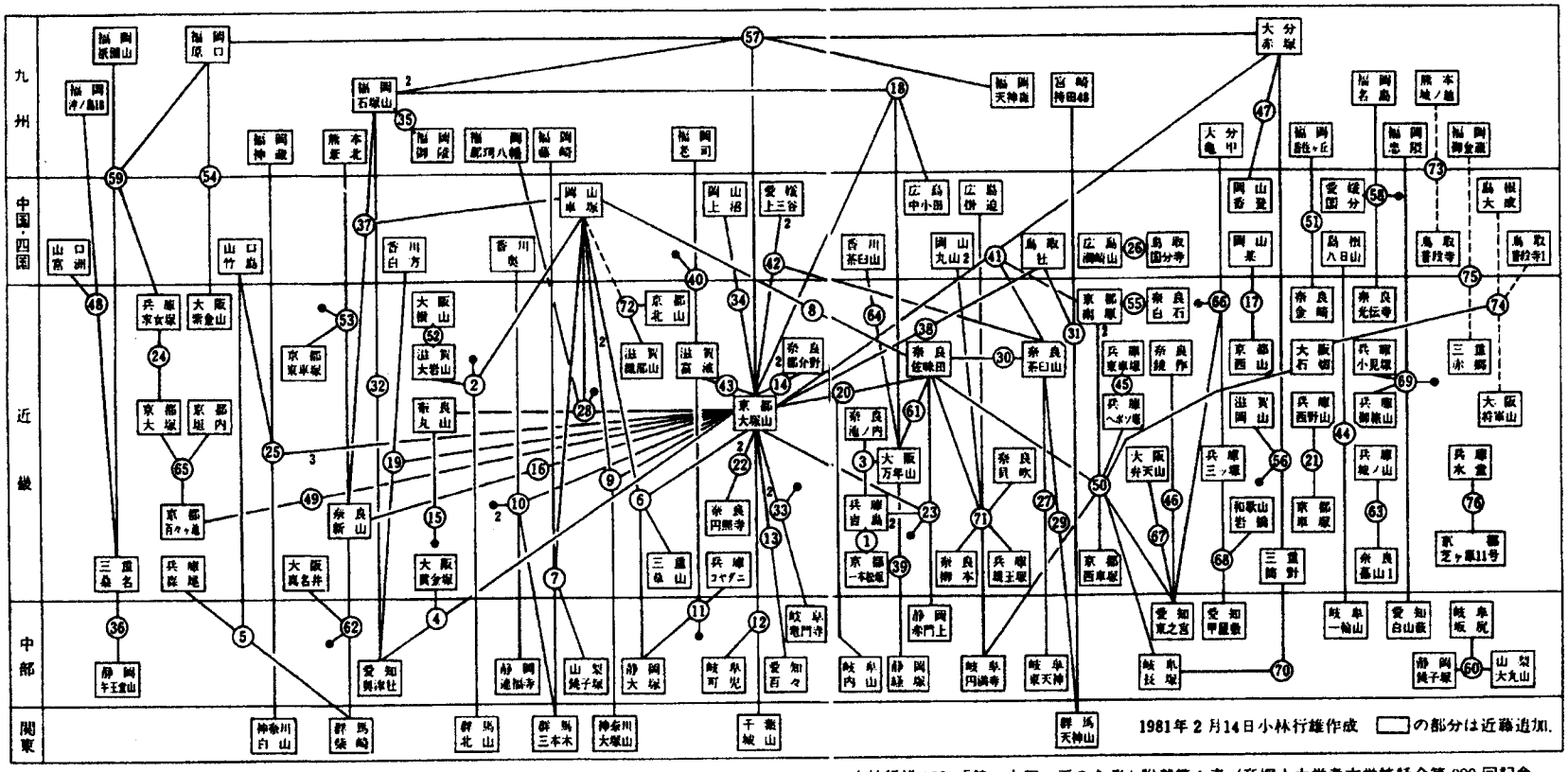
2　前方後円（方）墳

	南		山		城
	八　幡	大住・田辺	木津・山城	青　谷	城　陽
1期			椿井大塚山●170		
2期			平尾城山●110		
3期	八幡茶臼山■50 ヒル塚□52	大住南塚■71 興戸1号●24	平尾稲荷山○33 瓦谷○30		一本松□28 西山1号■76 上大谷8号■33 西山2号□27
4期	八幡西車塚●115 石不動●75 八幡東車塚●94	大住車塚■66　飯岡車塚●88 興戸2号○27			梅ノ子塚1号●87 西山4号○25 尼塚4号●36　庵寺山○56 尼塚□40
5期	美濃山王塚○60	ゴロゴロ山○60	幣羅坂※ 吐師七ッ塚3号□26		箱塚●100 芝ヶ原11号○67　丸塚●80　金比羅山○40 山道□？　下大谷1号□18
6期			吐師七ッ塚2号○26 上人ヶ平5号○24 吐師七ッ塚4号●35		久津川車塚●180 芝ヶ原10号○42　梶塚□50
7期			吐師七ッ塚5号○28 西山塚○26		宮ノ平1号□27　芭蕉塚●110 宮ノ平2号□39　青塚□50 宮ノ平3号○38
8期		トヅカ○20		青山2号※	赤塚○27 芝ヶ原5号●34
9期				青山1号●28 青谷石神1号●40 青谷丸山1号●30	坊主山1号●45 芝ヶ原6号●45　上大谷1号■30 長池●50
10期					坊主山2号○25

●前方後円墳　■前方後方墳　○円墳　□方墳

『前方後円墳集成　近畿編』山川出版社　1993年

三角縁神獣鏡の同笵関係



第25図　中国製三角縁神獣鏡の同笵鏡の分有関係（1982年）*

*小林行雄 1981「鏡・大刀・玉のなぞ」附載第1表（帝塚山大学考古学談話会第200回記念『古墳の謎を探る』）より引用.

近藤喬一『UP考古学選書[4]　三角縁神獣鏡』東京大学出版会　1988年

８９ｋｍ。

古代より明治に至るまで、大阪、京都と奈良を結ぶ交通路として、小型の舟や筏が行き交っていた。中でも木津川市（旧相楽郡）木津町は木材の集散地として栄えた港であったことが、その名の由来になっている。

《恭仁大橋から見た木津川》

三重県伊賀市で柘植川と服部川を、京都府相楽郡南山城村で名張川を集める。名張川合流点よりも上流を伊賀川と称することもある。青山高原に源を発し三重県伊賀市東部を北流。鈴鹿山脈の油日岳（標高６９４ｍ）からの柘植川と、布引山地の笠取山（標高８４５ｍ）からの服部川を伊賀市北部で合わせ、西流に転じる。

京都府に入るあたりから河谷を成し、相楽郡南山城村で高見山地の三峰山（標高１２３５ｍ）が水源の名張川を加える。木津川市に至り、再び北へ向かう。京田辺市東部から徐々に北西へと流れを変え、八幡市西端、京都府・大阪府境付近で北東からの宇治川（淀川水系本流）、北からの桂川と合流し、淀川となる。合流点の５ｋｍほど上流には増水すると踏み板が橋脚から外れる「流れ橋」として有名な上津屋橋が架かっている。

伊賀市から木津川市にかけて、ＪＲ関西本線と国道１６３号（伊賀街道）が並行する。木津川市以北の中・下流域では、東岸をＪＲ奈良線と国道２４号（奈良街道）が、西岸をＪＲ学研都市線と近鉄京都線とが沿う。

京田辺市周辺を中心として、河川敷には茶畑が多く存在する。

木津川の古名を「泉川」という。木津町のあたりで川は大きく北へ屈曲しているが、その少し手前、流れに沿って開けた平地を「瓶原（みかのはら）」といった。ここから南へ山越えれば奈良である。奈良時代の泉川は平城京を難波と結ぶ交通の大動脈であった。瓶原は山水の景観にも恵まれていたので、平城遷都後まもなく、泉河畔の地に元明天皇の離宮（甕原（みかのはら）離宮）が営まれた。

《海住山寺へと登る山道から見た瓶原遠景》

聖武天皇は皇太子時代からこの地を好み、たびたび滞在したが、天平１２年(740)、の藤原広嗣の乱に端を発した彷徨の末、ここを都と定めた。これが恭仁京である。

天平１６年(744)、聖武天皇は大仏造立の適地を求めてさらに紫香楽の地へと都を遷し、同年の山火事と地震によって平城旧京へ還都することになる。この時、恭仁京も打ち捨てられたのである。以後、瓶原の地はひっそりと時の流れの中に埋没していった。

今この土地を訪れれば、宅地化の波は押し止めようがないとしても、泉川はゆったりと青波を湛えて流れ、瓶原には野の花が咲き乱れている。華やかな天平の都がかつて存在したとはとうてい信じられない、のどかな田園の風景が広がるばかりである。４年にも満たない短命の都であったが、「国分寺・国文尼寺建立の詔」と、「大仏建立の詔」はこの都で出された。また、『万葉集』には泉川や恭仁京を詠んだ歌が少なからず収められている。

☆「万葉集」に多く歌われた泉川

やすみしし　我が大君　高照らす　日の皇子　荒栲の　藤原が上に　食す国を　見したまはむと　みあらかは　高知らさむと　神ながら　思ほすなへに　天地も　寄りてあれこそ　石走る　近江国の　衣手の　田上山の　真木さく　桧のつまでを　もののふの　八十宇治川に　玉藻なす　浮かべ流せれ　そを取ると　騒く御民も　家忘れ　身もたな知らず　鴨じもの　水に浮き居て　我が作る　日の御門に　知らぬ国　寄し巨勢道より　我が国は　常世にならむ　図負へる　くすしき亀も　新代と　泉の川に　持ち越せる　真木のつまでを　百足らず　筏に作り　泝すらむ　いそはく見れば　神ながらにあらし

[(やすみしし）我が大君　（高照らす）日の皇子様が　（荒栲の）藤原の地で　支配なさっているこの国を　ご覧になろうとして　宮を　高くお作りになろうと　神であるままに　お考えになると　天地も　従っているので　近江国の　（衣手の）田上山の（真木さく）檜を　宇治川に　美しい藻のように　浮かべて流しています　それを取ろうと　働く人々も　家のことも忘れて

自分のことも考えないで　鴨でもないのに　水に浮かんで　私たちが　造る日の宮に　知らない国も従わせ　巨勢道から　わが国が　理想的な国になるという　めでたい模様のある　霊妙な亀も　新しい時代だと　示しています　泉川に　持ち運んだ　檜の丸太を　（百足らず）いかだに組んで　川を上っているのでしょう　人々が一生懸命に働いているのを見ると　神そのままでいらっ

しゃる大君の思いのままのようです　　（巻１／５０）
※この歌の題詞には「藤原宮の役民が作る歌」とある。滋賀県の田上山で伐採された木材を筏に組んで、琵琶湖から宇治川（上流は瀬田川）を下し、それを下流で泉川へ運び入れ、今度は川を遡らせたことが分かる。そして現在の木津川市木津町で陸揚げされ、陸路を通って奈良山を越え、藤原の地へ運ばれたのである。この歌は泉川が後に木津川と呼ばれるようになった理由がよく分かる歌である。

なお、歌中の「大君」は持統天皇のこと。

「泉川　行く瀬の水の　絶えばこそ　大宮所　移ろひ行かめ」（巻６／１０５４）

［泉川の　流れ行く瀬の水が　絶えたならば　大宮所は　廃れることもあるだろう（泉川の水が絶えることなどあり得ない。それと同じように大宮所は永遠である）］

「たたなめて　泉の川の　水脈絶えず　仕へまつらむ　大宮所」（巻１７／３９０８）

［（たたなめて）泉川の　水脈の絶えることがないように絶えず　お仕えしよう　大宮所に］

※上記の「大宮所」は、いずれも聖武天皇の恭仁京のことである。

「妹が門　入り泉川の　常滑に　み雪残れり　いまだ冬かも」　（巻９／１６９５）

［妻の家の門を　入り出づという泉川の　つるつるとした岩に　雪が残っている　まだ冬なのだろうか］

「泉川　渡り瀬深み　我が背子が　旅行き衣　ひづちなむかも」（巻１３／３３１５）

［泉川の 渡り瀬が深いので あの人の　旅の着物が　濡れたりしないでしょうか］

★泉橋寺

木津川市山城町大字上狛小字西下５５に所在する寺院。

木津川に架かる泉大橋の土手の下に浄土宗、玉龍山泉橋寺の屋根が集落の中に見える。土手を下り裏から入ると泉橋寺で、本尊は阿弥陀如来、天平１２年(740)、行基が泉川（現在の木津川）に泉大橋を架けた時に創建した泉橋院（発菩薩院、隆福尼院）を前身とする寺院、いわゆる橋寺で、行基が五畿内に造営した４９院の一つである。治承４年(1180) １２月２８日、平重衡が南都攻めをした時に焼かれて、その後再建されたが、１４世紀、元弘の乱でも再び兵火で焼失。しかし、境内やその周辺から奈良時代の古瓦が出土して、その時代の塔の心礎も存在し、塔が建っていたこ

《泉橋寺山門》

とが知られている。

本堂北側に、五輪塔が建っている。奈良時代、聖武天皇の皇后、光明皇后の御遺髪を祀るために建立された塔と伝えられている。

この五輪塔（重文）は束石の間に羽目石を置き、その上に蔓石の盤を置いてから、框座の上に複弁の反花を設けて、その上に高さ212ｃｍで安置されている。

《日本最大の石造地蔵》

山門の左脇に「山城大仏」と呼ばれる丈六の大きな「石造地蔵菩薩坐像」が鎮座している。高さ約4．85m日本有数の「地蔵石仏」である。願主は般若寺の真円上人である。現在は露座だが、永仁３年(1295)、地蔵石材が切り出し初めてから１３年後、徳治３年(1308)に地蔵堂が棟上され、供養された時は、堂内に安置されていた。その後、応仁の乱が兵火が南山城地方にもおよび、文明３年(1471)、大内政弘の軍勢が木津や上狛を攻めて焼き払った時、泉橋寺の地蔵堂も兵火で焼かれて、石仏も損傷した。それ以来、地蔵石仏は、露座のままで、頭部と両腕は元禄３年(1690)の後補である。

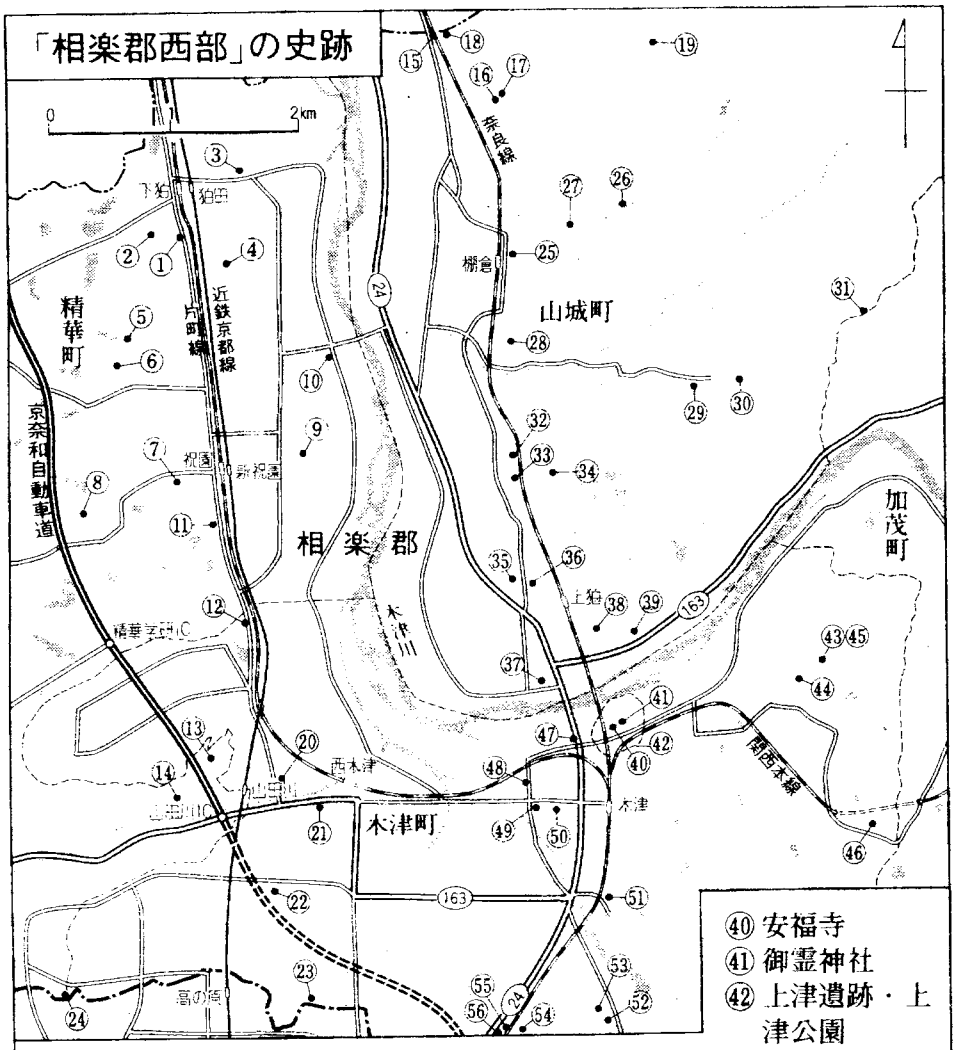
☆行基

奈良時代、社会事業に尽力した法相宗の僧。父は百済から渡来した王仁の子孫にあたる高志氏。和泉国（大阪府）の母の家（家原寺）に生まれ、１５歳で出家。師は法相宗初伝の道昭、その他の説がある。

のち薬師寺の僧となり、土木技術の知識を学び、各地に橋を架け、堤を築き、池や溝を掘り、道をつけ、樋を渡し、船息をつくった。また当時、税として納められた諸国の産物を都へ運ぶ運脚夫は帰国の途中餓死する者が多かったので、彼らを収容し救うための施設として布施屋を８ヶ所つくったと伝えられる。

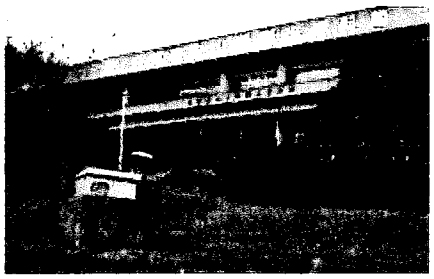
行基は各地を周遊したが、とどまった所に道場が建てられ、その数は４９院あったともいう。民衆への伝道にも努め、彼を慕って従う者千名にも及び、行基菩薩と称された。養老元年(717)の詔では、行基とその徒が、町でみだりに罪福を説き、多くの人が仕事を放棄して集団をなして食物を乞い、仏教と国法とに違反している、と叱責されているが、のちに政府は、高齢の追随者には出家を認めるなど融和策をとった。

さらに聖武天皇の大仏造営に際しては、絶大な民衆への影響力により、大仏造営費の勧進に起用された。天平１７年(745)、７８歳で大僧正に任ぜられ、仏教界における最高の地位を占めた。僧正は以前からあったが、大僧正は行基が初めてである。大仏完成の３年前、天平２１年(749) 2月2日、菅原寺（奈良市）で８２歳で没した。



① 若王寺
② 鞍岡山古墳群・鞍岡神社
③ 春日神社
④ 想念寺・里廃寺跡
⑤ 瓜生田遺跡の碑
⑥ 武内神社
⑦ 丸山古墳
⑧ 稲八妻城跡
⑨ 常念寺
⑩ 祝園神社・柞ノ森
⑪ 来迎寺
⑫ 吐師七ツ塚古墳
⑬ 新殿神社
⑭ 樋ノ口遺跡
⑮ 極楽寺
⑯ 蟹満寺
⑰ 綺原神社
⑱ 高倉神社
⑲ 光明山寺跡
⑳ 藤原百川夫妻の墓
㉑ 相楽神社
㉒ 法泉寺
㉓ 音如ヶ谷瓦窯跡
㉔ カザハイ(石のカラト)古墳
㉕ 湧出宮・湧出宮遺跡
㉖ 谷山不動
㉗ 不動川砂防歴史公園
㉘ 平尾城山古墳
㉙ 神童寺
㉚ 天神神社
㉛ 鳶城跡
㉜ 椿井大塚山古墳
㉝ 天上山古墳・椿井城跡
㉞ 松尾神社
㉟ 狛城跡・山城国府推定地
㊱ 西福寺
㊲ 泉橋寺
㊳ 高麗寺跡
㊴ 京都府立山城郷土資料館
㊵ 安福寺
㊶ 御霊神社
㊷ 上津遺跡・上津公園
㊸ 鹿背山
㊹ 西念寺
㊺ 鹿背山城跡
㊻ 鹿背山不動
㊼ 大智寺
㊽ 正覚寺
㊾ 天王神社
㊿ 木津惣墓の五輪塔
(51) 岡田国神社
(52) 幣羅坂神社
(53) 安養寺
(54) 瓦谷古墳
(55) 上人ヶ平遺跡
(56) 市坂瓦窯跡

★京都府立山城郷土資料館



《京都府立山城郷土資料館外観》

木津川市山城町上狛千両岩に所在する府立の歴史資料館。

国道２４号線から、東へ向けて国道１６３号線へ入ってすぐ、山城郷土資料館がある。

木津川市には数多くの遺跡・文化財がある。縄文時代・弥生時代の遺跡、三角縁神獣鏡が出土した椿井大塚山古墳、大王の墓といわれる久津川車塚古墳、高麗寺などの初期仏教文化の寺院跡、一時は都が置かれた恭仁京、浄瑠璃寺、当尾の石仏群等々。このような文化財を、考古・歴史・民俗の各分野にわたって調査研究し、その成果を「南山城の歴史と文化」というテーマで常設展示している。また、折りにふれ、企画展・特別展、各種講座等のイベントも行われている。

★笠置寺・笠置城跡

《笠置寺山門》

笠置寺は、京都府相楽郡笠置町にある真言宗智山派の仏教寺院。山号は鹿鷲山。本尊は弥勒磨崖仏。開基は大友皇子または天武天皇と伝えられる。歴史的に南都（奈良）の東大寺や興福寺などと関係が深く、解脱房貞慶などの著名な僧が当寺に住したことで知られ、日本仏教史上重要な寺院である。また、境内は鎌倉時代末期、元弘の乱の舞台となったことで知られる。

笠置寺は京都府の南東部、奈良県境に位置する笠置町にあり、東西に流れる木津川の南岸、標高２８９ｍの笠置山を境内とする。笠置は奈良方面からの月ヶ瀬街道と、京都方面から伊賀へ向かう伊賀街道の交わる地であり、地理的にも歴史的にも南都（奈良）との関わりが深い。また、平城京の宮殿や寺院などの建築用材は木津川の上流から舟で運ばれたとされており、笠置は水陸交通の要地であった。

笠置寺は磨崖仏の巨大な弥勒仏を本尊とする寺で、平安時代以降、弥勒信仰の聖地として栄えた。笠置山は、標高は３００ｍに満たないが、山中の至るところに花崗岩の巨岩が露出し、古くから山岳信仰、巨石信仰の霊地であったと推定されている。日本では太古から山岳、滝、巨岩、巨樹などの自然物が崇拝の対象とされ、巨岩は磐座と呼ばれて、

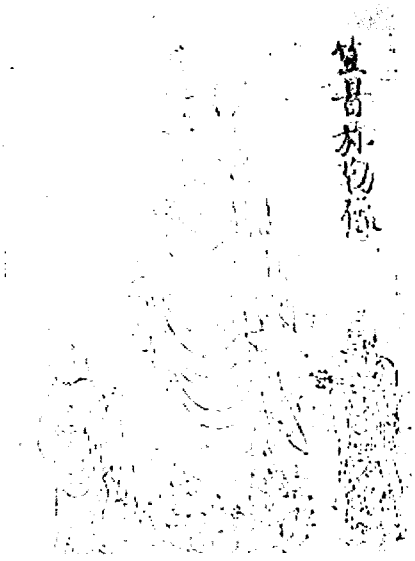
神の依代、すなわち神の宿る場所とされていた。笠置山はこうした巨石信仰、山岳信仰が仏教思想と結び付き、山中の巨岩に仏像が刻まれ、次第に仏教寺院としての形を整えていったものと推定されている。

《本尊の弥勒菩薩磨崖仏》

笠置寺の創建については諸説あって定かでない。『笠置寺縁起』には白鳳１１年(682)、大海人皇子（天武天皇）の創建とある。一方、『今昔物語集』巻１１には笠置の地名の起源と笠置寺の弥勒磨崖仏の由来について、次のように伝えている。

天智天皇の子である大友皇子はある日、馬に乗って鹿狩りをしていた時、笠置山中の断崖絶壁で立ち往生してしまった。鹿は断崖を越えて逃げ去り、自らの乗る馬は断崖の淵で動きがとれない。そこで山の神に祈り、「もし自分を助けてくれれば、この岩に弥勒仏の像を刻みましょう」と誓願したところ、無事に助かった。大友皇子は次に来る時の目印として、自分の笠をその場に置いていった。これが笠置の地名の起こりであるという。その後、皇子が再び笠置山を訪れ、誓願どおり崖に弥勒の像を刻もうとしたところ、あまりの絶壁で思うにまかせない。しかし、そこへ天人が現れ、弥勒像を刻んだという。これが笠置寺の弥勒磨崖仏の由来であるという。

以上の話はむろん伝承にすぎないが、笠置寺の始まりが弥勒磨崖仏造立であったこと



《笠置寺の本尊・弥勒磨崖仏と仁和寺に残された最古のスケッチ》

を示唆している。『東大寺要録』元慶元年(879)条に「笠置寺八講始行」とあるのが笠置寺の文献上の初見であるが、実際の創建は奈良時代にさかのぼるものと思われる。

また、笠置寺には東大寺の開山で初代別当（寺務を統括する僧）であった良弁や、その弟子で「お水取り」の創始者とされる実忠にかかわる伝承も残っている。伝承によれば、良弁は笠置山の千手窟に籠って修法を行い、その功徳によって木津川の舟運のさまたげとなっていた河床の岩を掘削することができたという。

一方、良弁の弟子、実忠にかかわる伝承は次のようなものである。笠置山には龍穴という奥深い洞窟があり、その奥は弥勒菩薩の住む兜率天（とそつてん）へつながっているといわれていた。実忠はある日龍穴で修行中、思い立って龍穴の奥へと歩いていくとやがて兜率天に至った。兜率天の内院四十九院をめぐった実忠が、そこで行われていた行法を人間界に伝えたのが東大寺のお水取りであるという。

平安時代後期には末法思想の広がりとともに、未来仏である弥勒への信仰も高まり、皇族、貴族をはじめ当寺の弥勒仏へ参詣する者が多かった。永延元年(987)、円融院の行幸（『百錬抄』、公家の日記などの諸記録を抜粋・編集した鎌倉時代後期の歴史書）、寛弘４年(1007)、藤原道長の参詣（『御堂関白記』）などが記録に残っている。

鎌倉時代初期の建久４年(1193)には、日本仏教における戒律の復興者として知られる興福寺出身の僧、解脱房貞慶（げだつぼうじょうけい）（久寿２年[1155]～建暦３年[1213]）が笠置寺に住している。貞慶は藤原通憲（信西）の孫にあたり、鎌倉時代に台頭した新仏教（浄土教など）に対する旧仏教側の代表的な僧である。学僧として名が高かったが、南都の仏教の退廃を嘆き、笠置に隠棲した。以後、承元２年(1208)、観音寺（海住山寺（かいじゅうせんじ））に移るまでの十数年間を笠置で過ごしている。この時期に寺は最盛期を迎え、伽藍が整備された。建久５年(1194)には般若台が建立された。これは大般若経を安置する六角形の堂であった。建久７年(1196)には俊乗房重源（しゅじょうぼうちょうげん）（東大寺大仏殿の再建に尽力したことで知られる）によって梵鐘（現存）や宋版大般若経が施入され、建久９年(1198)には木造の十三重塔が建立された。元久元年(1204)には源頼朝が礼堂（弥勒磨崖仏を礼拝するための建物）の再興費として砂金を寄進している。寛喜２年(1230)には東大寺の学僧・宗性が入寺した。

元弘元年（元徳３年、1331）８月、鎌倉幕府打倒を企てていた後醍醐天皇は御所を脱出して笠置山にこもり、挙兵した（元弘の乱）。後醍醐天皇が山岳寺院笠置寺を利用して城としたものである。笠置城は同年９月に落城、後醍醐

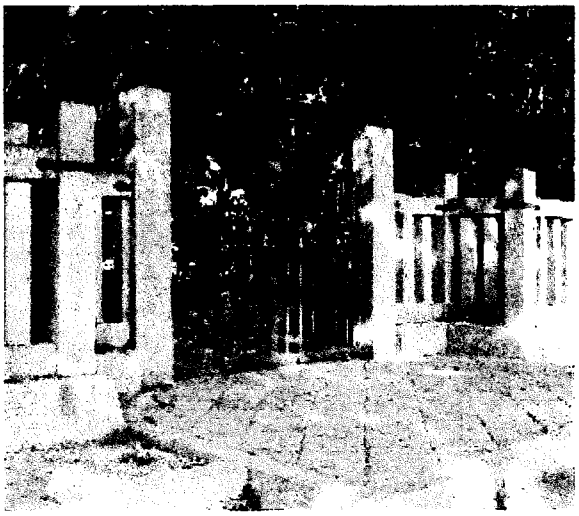
《笠置山遠景》

天皇は逃亡するが捕えられ、隠岐国へ流罪になった。この戦乱時の兵火で笠置寺は炎上し、弥勒磨崖仏も火を浴びて石の表面が剥離してしまった。

戦国時代の天文年間、笠置城は河内飯森山城主代木沢長政の持城となっていた。長政は、主家であった河内高屋城主畠山氏から実権を奪い、河内・山城守護代に任じられ、河内・山城・大和周辺にて軍事行動をたびたび行っている。天文１１年(1542)、長政は、細川晴元・三好長慶と河内大平寺にて合戦し討ち死にした。

《山内に残る空堀跡》

笠置山には弥勒磨崖仏の他に薬師石、文殊石、虚空蔵石、両界曼荼羅石などがあり、かつてはそれぞれに線刻の仏像や曼荼羅図が刻まれていたが、兵火でほとんどが失われ、わずかに虚空蔵菩薩像の刻まれた石のみが当初の姿をとどめている。弥勒磨崖仏は高さ約１６m、幅約１５mの岩に刻まれたが、現状では光背の窪みが確認できる程度で像の姿は全く失われており、往時の像容は『覚禅鈔』（図像集）所収の図像や、大和文華館所蔵の「笠置曼荼羅図」（重要文化財）から偲ぶほかない。「笠置曼荼羅図」には、弥勒磨崖仏と木造十三重塔が描かれており、最盛期の境内の様子がこの絵から想像される。なお、奈良県宇陀市の大野寺に現存する弥勒磨崖仏は笠置寺の磨崖仏を模したものと伝えられている。



《後醍醐天皇行在所跡》

寺は暦応２年(1339)に再興されるが、文和４年(1355)、再び焼失。永徳元年(1381)には本堂が再興されるが（文明１４年[1482]の勧進帳）、応永５年(1398)に焼失するなど、再興と焼失を繰り返すが、以後、最盛期の規模が復活することはなかった。

元和５年(1619)、笠置は伊勢国津藩の所領となった。藩主藤堂高次は慶安年間（１６４８～１６５２）に笠置寺本堂を再興した。しかし、近世末には衰退して明治時代初期には

《本尊の横にある十三重石塔（重文）》

無住となってしまった。現在の寺は明治９年(1876)に再興されたものである。

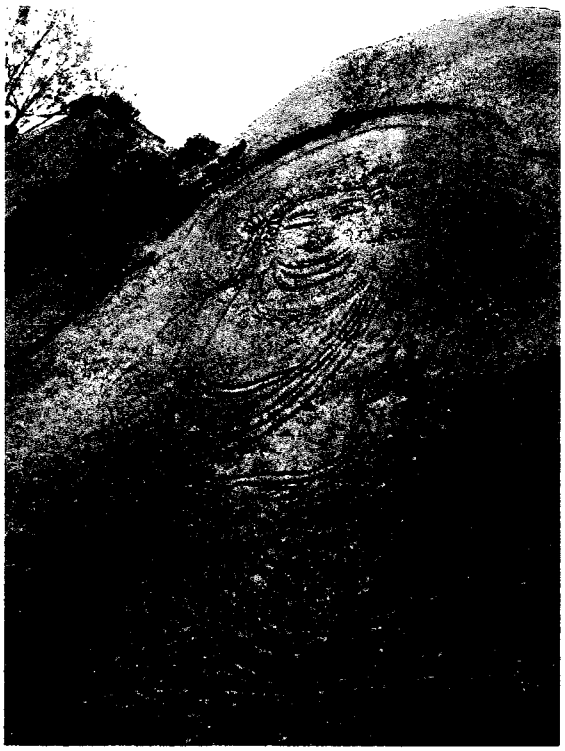
山門をくぐると本坊、毘沙門堂（平成１６年[2004]建立)、収蔵庫、鐘楼（コンクリート造）などが建ち、その奥に一周約８００ｍの修行場がある。修行場には「胎内くぐり」「蟻の戸渡り」「ゆるぎ石」などと名付けられた岩が点在しており、途中に弥勒磨崖仏（現在は光背を残すのみ)、正月堂（弥勒磨崖仏の礼堂)、石造十三重塔、虚空蔵菩薩磨崖仏、後醍醐天皇行在所跡などがある。

《笠置寺梵鐘》

また、歴史的なものではないが、笠やん追悼碑もある。これは、１９９０年代に笠置寺に住み着き、案内をする名物猫として有名になった野良猫「笠やん」の追悼碑である。石造十三重塔はかつて存在した木造十三重塔の跡に建てられている。鎌倉時代末～室町時代の建立である。

梵鐘は建久７年(1196)の作。銘文から、大和尚南無阿弥陀仏（俊乗房重源）が笠置寺の般若台（大般若経を安置する六角堂）の鐘として寄進したことがわかる。最下部に六つの切り込みを入れて六葉形にするのは中国鐘にみられる形式で、日本の梵鐘には珍しいものである。また、銘文を鐘の側面でなく下面に刻むのも珍しい。重源と貞慶という鎌倉時代仏教界の高僧２人の交流を証するものとして史料的にも貴重である。

虚空蔵菩薩磨崖仏は元弘の乱の戦火をまぬがれて現存する磨崖仏である。花崗岩の絶壁に蓮華座上に坐し、右手を挙げ、左手を膝上に置く形の菩薩像を線刻する。虚空蔵菩薩と称されているが、如意輪観音とする説もある。制作年代についても比較する作例に乏しいことから定かでなく、奈良時代とも平安時代ともいわれている。


《虚空像菩薩の磨崖仏》

☆笠置山の戦い

笠置山の戦いは、鎌倉時代後期の元弘元年(1331)９月に山城国相楽郡笠置山（現在の京都府相楽郡笠置町）において、鎌倉幕府打倒を企てる後醍醐天皇側と、鎌倉幕府側との間で行われた戦いである。元弘の乱の一連の合戦の一つ。

《後醍醐天皇像》

鎌倉時代後期において、皇位継承をめぐり持明院統と大覚寺統との間で紛議が起こり、文保元年(1317)には幕府の調停によって持明院統と大覚寺統が交代で皇位を継承をすることとされた（文保の和談）。翌年の文保２年(1318)２月２６日には、持明院統の花園天皇の譲位により大覚寺統の尊治親王（後醍醐天皇）が践祚した。３１歳という当時においては異例ともいえる高年齢で践祚した後醍醐天皇は、大覚寺統において一代限りの中継ぎとみなされていた。しかし、天皇は自身の直系の子孫に皇位が継承されることを望み、そのためには障害になるであろう幕府を打倒することを企てるようになる。正中元年(1324)には、天皇の討幕計画が発覚し、天皇側近の日野資朝が流罪に処せられている（正中の変）。

その後、後醍醐天皇は討幕を再び企てるようになるが、元徳３年(1331)４月になると、天皇側近の吉田定房が六波羅探題に密告したために討幕計画が再び発覚した。計画に関与した日野俊基、文観ら天皇側近は幕府側に逮捕され、天皇にも幕府の追及の手が伸びようとしていた。

元弘元年８月２４日、幕府による捕縛の危険を察知した後醍醐天皇は、三種の神器を持って側近とともに京を脱出した。幕府側の追跡をかわすために天皇に変装した花山院師賢は比叡山へ向かい、天皇は千種忠顕、四条隆資らとともに東大寺を経て金胎寺に赴き８月２７日には笠置山に至った。

一方、天皇が比叡山にはいないことに気付いた幕府側は９月１日に宇治において７万５千の兵を集め、翌日には笠置山を包囲してこれを攻撃し始めた。天皇側の兵は３千余と戦力の面では圧倒的に不利な状況ではあったが、笠置山は天然の要害ということもあって幕府側相手に善戦していた。

その後、９月２８日の夜、暴風雨の中、幕府側の陶山義高ら決死隊が北壁をよじ登り、山に放火したことによって天皇側は総崩れとなり、笠置山はついに陥落した。翌日には天皇は幕府側に捕らえられた。

笠置山の陥落に先立って、９月２０日に幕府は後醍醐天皇の皇太子とされていた持明院統の量仁親王（光厳天皇）を後鳥羽天皇の先例により三種の神器のないまま践祚させた。幕府側に捕らえられた後醍醐天皇は神器を光厳天皇に譲渡し、翌年の元弘２年＝元

徳４年(1332)３月７日、隠岐島へ流された。５月には笠置山の戦いにおいて天皇側の武将として奮戦した足助重範(あすけしげのり)が、６月には天皇側近の日野資朝、日野俊基、北畠具行が幕府によって処刑された。

しかし、翌年の元弘３年＝正慶２年(1333)閏２月２４日に後醍醐天皇が隠岐島を脱出し、５月には幕府から離反した足利高氏（尊氏）が六波羅探題を、新田義貞が鎌倉を攻撃して幕府を滅亡させた。光厳天皇は廃位され、６月には後醍醐天皇によって建武の新政が開始されることになるのである。

☆笠置山の霊夢

《楠木正成像》

『後醍醐帝笠置山皇居霊夢之圖』（尾形月耕）

『太平記』の３巻によると、後醍醐天皇は笠置山の笠置寺に行在所を設けたが、自身のまわりに名のある武将がまったくいないことに不安に感じていて、思い悩んで寝ていると夢を見たという。庭に南向きに枝が伸びた大きな木があり、その下には官人が位の順に座っていた。南に設けられていた上座にはまだ誰も座っておらず、その席は誰のために設けられたものなのかと疑問に思っていた。すると童子が来てその席はあなたのために設けられたものだといって空に上って行っていなくなってしまった。夢から覚めて、天皇は夢の意味を考えていると「木」に「南」と書くと「楠」という字になることに気付き、寺の衆徒にこの近辺に楠という武士はいるかと尋ねたところ、河内国石川郡金剛山（現在の大阪府南河内郡千早赤阪村）に楠木正成という者がいるというので、急きょ正成を笠置山に呼び寄せたという。

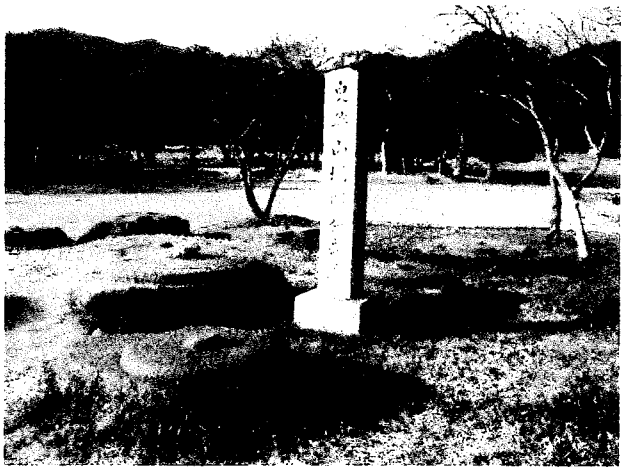
以上が『太平記』が描く後醍醐天皇と楠木正成の初対面だが、これは史実ではない可能性が高い。正成は天皇側近の文観と接点があったらしく、『増鏡』によると、天皇側は前もって正成を頼りにしていたとされる。

★恭仁宮跡・山城国分寺跡

恭仁宮(くにのみや)は、奈良時代の一時期、都が置かれた山城（山背）国の地、現在の京都府木津川市加茂町例幣(れいへい)に所在する。正式名称は「大養徳恭仁大宮(やまとくにのおおみや)」ともいう。

昭和３２年(1957)年７月１日、山城国分寺跡として、国史跡に指定されていたが、平成１８年(2006)１１月１７日の文化審議会で、恭仁宮跡（山城国分寺跡）に名称変更が答申され、平成１９年(2007)２月６日付け官報告示で確定した。この変更で、史跡範囲も大きく拡大した。

藤原広嗣の乱の後、天平１２年(740)１２月１５日聖武天皇によって、平城京から遷都された。この地が選ばれた理由として太政大臣、橘諸兄(たちばなのもろえ)の本拠地であったことが指摘されている。天平１３年(741)９月に左京右京が定められ、１１月には「大養徳恭仁大宮」という正式名称が決定され、宮殿が造られた。都としては完成しないまま天平１５年(743)の末には、この京の造営は中止されて聖武天皇は紫香楽宮(しがらきのみや)に移り、天平１６年(744)に難波京に遷都、さらに天平１７年(745)、平城京に還都した。



《山城国分寺跡の巨大な塔礎石》

《恭仁京大極殿址碑》

わずか３年余りの都であったが、日本の文化史上の重要事項である「国分寺・国文尼寺建立の詔」と、「大仏建立の詔」はこの都で出され、実行に移された。

遷都後、宮城の跡地は山城国分寺として再利用されることになった。大極殿は金堂に転用されたという。南北３町（約３３０m）、東西２町半（約２７５m）の広大な寺域を有していた。金堂の東側は国分寺の鎮守社である御霊神社の境内地だったとされる。現在は広大な平原となっており、金堂（大極殿）礎石と七重塔礎石が地表に残されている。

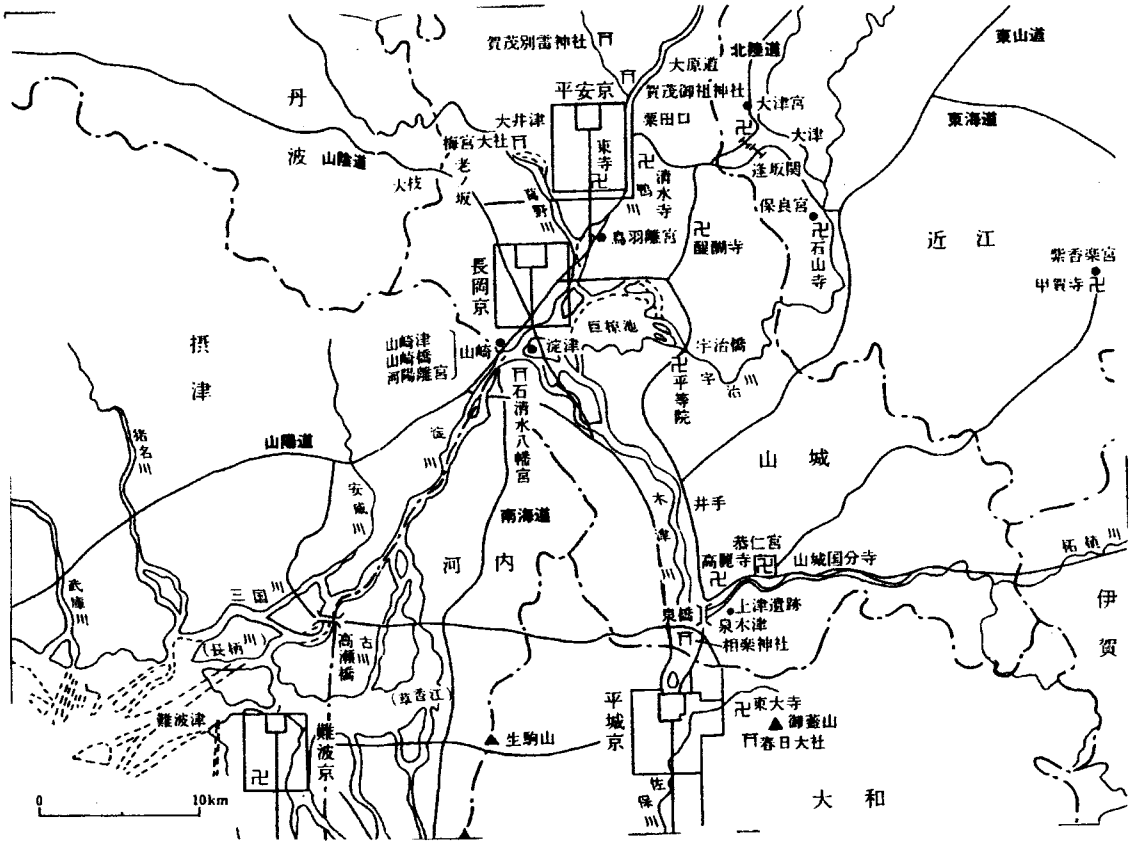
☆「万葉集」に詠われた恭仁京・瓶原

「山背(やましろ)の　久邇(くに)の都は　春されば　花咲きををり　秋されば　黄葉(もみち)にほひ　帯(お)ばせる　泉(いづみ)の川の　上つ瀬に　打橋(うちはし)渡し　淀瀬(よどせ)には　浮橋(うきはし)渡し　あり通ひ　仕(つか)へまつらむ　万代(よろづよ)までに」　（巻１７／３９０７）

［山背の　久邇の都は　春になると　花が咲き盛り　秋になると　黄葉が美しく色付く　帯になさる泉川（木津川）の　上流の瀬に　打橋を渡し　淀瀬には　浮橋を渡し　通い続けてお仕えしよう　万代の後までも］

「今造(いまつく)る　久邇(くに)の都は　山川(やまかは)の　さやけき見れば　うべ知らすらし」（巻６／１０３７）

［今造っている　久邇の都は　山と川の　すがすがしさを見ると　（ここに都を定めら



《畿内北部の都と交通（『岩波日本史辞典』を改変）》

れたのは）　まことにもっともなことと思われる]

「三香原（みかのはら）　久邇（くに）の都は　山高み　川の瀬清み　住みよしと　人は言へども　ありよしと　我れは思へど　古（ふ）りにし　里（さと）にしあれば　国見れど　人も通はず　里見れば　家も荒れたり　はしけやし　かくありけるか　みもろつく　鹿背山（かせやま）の際（ま）に　咲く花の　色めづらしく　百鳥（ももとり）の　声なつかしく　ありが欲（ほ）し　住みよき里の　荒るらく惜（を）しも」

（巻6／1059）

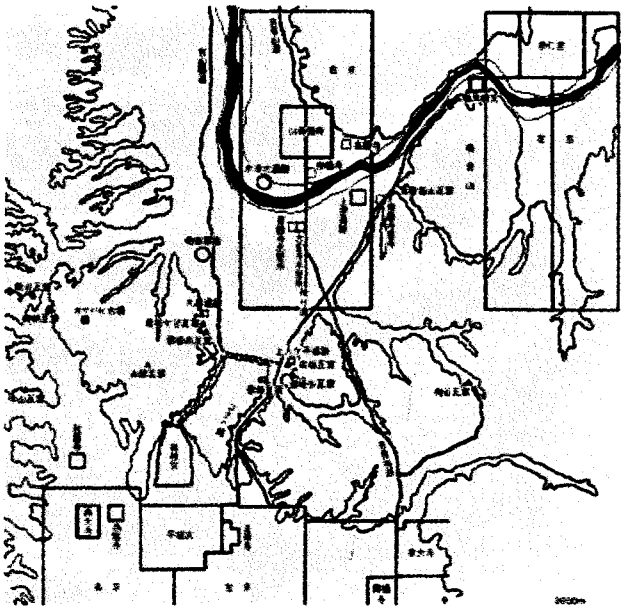
［三香原の　久邇の都は　山が高く　川瀬も清らかなので　住みよいと　人は言うけれど　居やすいと　私は思うのだが　捨てられた　里であるから　国を見ても　人も往き来せず　里を見ると　家も荒れている　ああ　こうもはかないものだったのか　神を祀る　鹿背山のほとりに　咲く花の　色は素晴らしく　百鳥の　声が捨てがたい　いつまでも住み続けたい　住みよい里の　荒れてゆくのは惜し

《秋桜の咲き乱れる瓶原》

いことだ]

☆遷都を繰り返した恭仁京の時代

天平１６年(744)から天平１７年(745)にかけては、律令国家にとって転換点となる２年間であった。この間に宮都は目まぐるしく転変し、橘諸兄を主導とする遷都計画はことごとく失敗に帰した。そして政界の主導権は、しだいに藤原仲麻呂の手へと移ってゆくことになる。



《恭仁京想定図》

天平１６年閏１月１日、聖武天皇は朝堂に官人を集め、恭仁・難波の何れを都とすべきか下問した。前年末、恭仁宮の建設が中止されたため、古来の副都として機構の整っていた難波京への遷都が議題に上っていたと思われる。投票の結果は、わずかに恭仁京が上回ったものの、ほぼ互角であった。結論の出ないまま、１０日後には難波行幸が敢行されることとなる。同年閏１月１１日、難波宮に向けて車駕(しゃが)は出発したが、途中、安積親王が脚病を発して桜井頓宮より恭仁京に帰還し、２日後に急死するという事件が起こる。親王は当時１７歳、唯一の聖武天皇の皇子であり、母は諸兄と縁戚のある県犬養(あがたいぬかい)氏の出身であった。親王の死は、一説に恭仁京の留守官をしていた藤原仲麻呂による謀殺ともいわれている。真相は闇の中だが、いずれにしても、光明皇后と皇太子阿倍内親王を推し立てる藤原氏にとっては、最も大きな障害が取り除かれたことになる。

同年２月２０日、恭仁京の高御座(たかみくら)・大楯・兵器が難波宮に運ばれ、既に難波遷都が決せられたことが窺われる。ところが２月２４日、天皇は難波を去り、紫香楽へと還幸した。以後、聖武天皇は大仏造立に没頭し、翌年５月まで紫香楽宮に滞留することになる。

一方、元正太上天皇と左大臣橘諸兄は難波に留まり、２月２６日、諸兄がこの地を皇都とする勅を伝えた。もはや財政的に恭仁京の維持は不可能であり、自ら唱導した新京を放棄せざるを得なかったのである。諸兄にとっては辛い選択だったに違いない。

同年１１月１３日、紫香楽の甲賀寺(こうかでら)に大仏像の体骨柱が建てられ、天皇自ら縄を引いた。１１月１７日日には、元正上皇が難波より紫香楽宮に到着、ここにようやく国政二分の危機は解消された。大仏造立にかける聖武天皇の執念には、上皇も諸兄も折れるほかなかったのだろう。

天平１７年の年が明けると、紫香楽宮への遷都が宣言された。おそらく、難波を王法の都とし、紫香楽を仏法の都としてその上に位置づける、という構想があったものと思われる。この直後には行基が大僧正に任命されており、紫香楽遷都に果たした行基の役割の大きさが窺われる。

ところが、この年夏ころから異変が続発する。一昨年以来の大旱魃が起こり、秋の稔りは絶望的となった。極度の乾燥と強い日射しから、紫香楽宮周辺の山では火災が頻発した。さらに追い打ちをかけるように、４月末には美濃を中心に大地震が起こったのである。山火事は消えず、余震は紫香楽を揺るがし続けた。『続日本紀』は「是の月（５月）、地震（なゐ）ふること常に異なり。往往坼（ひら）き裂けて水泉湧き出づ」と記録している。

ついに５月５日、聖武天皇は紫香楽を捨てて恭仁京へ向かい、さらに５月１１日には奈良旧京に還幸した。民衆も競って平城を目指し、その行列は昼夜途切れることなく続いたという。

紫香楽での一連の火災は、異常な気象条件下での自然災害とも考えられるが（当年の『続日本紀』は旱魃と雨乞いを報じている）、山林の管掌にあたった民部省の長が藤原仲麻呂であったことを考えれば、平城への還都を謀る一部官人による放火と見る説も捨てきれない。

災異の収まった秋８月、聖武天皇は再び難波宮へ行幸しており、なお遷都は流動的な状況にあった。しかし、難波に到着された天皇は病に倒れ、翌９月には平城京に還御、年末には恭仁京の兵器が平城に運ばれ、還都が確定するに至る。恭仁京遷都から５年、都は彷徨の末、平城の旧都に帰着したのであった。

★石のカラト古墳

木津川市兜台２丁目および奈良市神功１丁目に所在する終末期古墳。

この古墳は、８世紀初めの築造と推定され、昭和５６年(1979)の発掘調査で、上段が円形（直径約９．２ｍ）下段が方形（一辺約１３．８ｍ）の上円下方墳であることが判明した。

《石のカラト古墳（鏡餅のように見えるが…）》

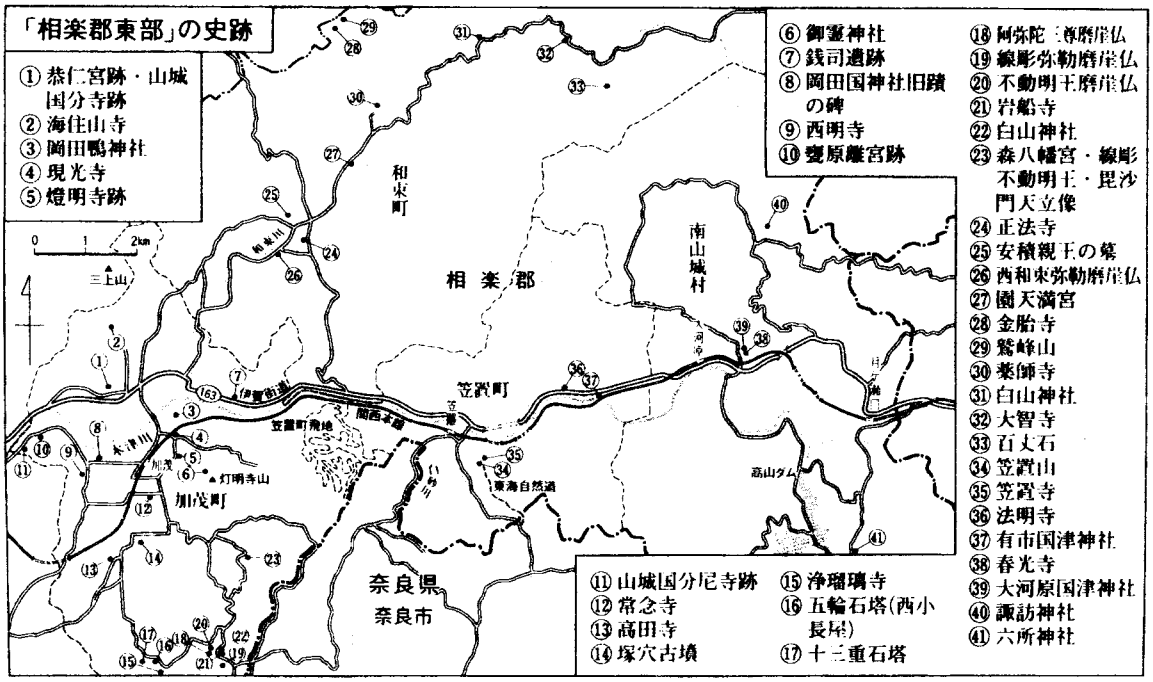
下段の表面には、３０ｃｍ大の石を葺いたが、上段の葺石は、ほとんど失われていた。古墳の中に造られた石室は、壁画古墳として知られる飛鳥高松塚古墳と同じ横口式石槨で、間口１．１５ｍ、奥行２．６ｍ、高さ１．２ｍあり、１５枚の凝灰岩の切石でできている。

「カラト」の名は、この石室が唐櫃に似ていることからつけられたようだ。石室内は、

盗掘のため、荒らされていた。漆塗りの棺が納められていたらしく、漆の破片、金・銀の玉など豪華な副葬品の一部が出土している。

葬られていた人物は不明が、奈良時代初めの貴族と推定され、平城京の北郊である奈良山丘陵に造らた、数少ない終末期古墳として、昭和６２年(1987)の復原整備の後、平成８年(1996)に、国史跡に指定された。

《近づいて見ると上円下方墳》



一泊旅行　南山城、その輝ける歴史の道をゆく

―泉川の滔々とした流れに沿って―

平成２１年(2009) 6月6・7日 (土・日)

講師・資料作成　篠原芳秀・平田恵彦